義經記

一二

リ5
482
1

義経記巻第一目録

よしとも都おちの事

ときわみやこおち乃事

うしわか鞍馬入の事

志やうもんばう乃事

うしわかきぶねまうでの事

吉次が奥州物語乃事

志やなわう殿くらま出の事

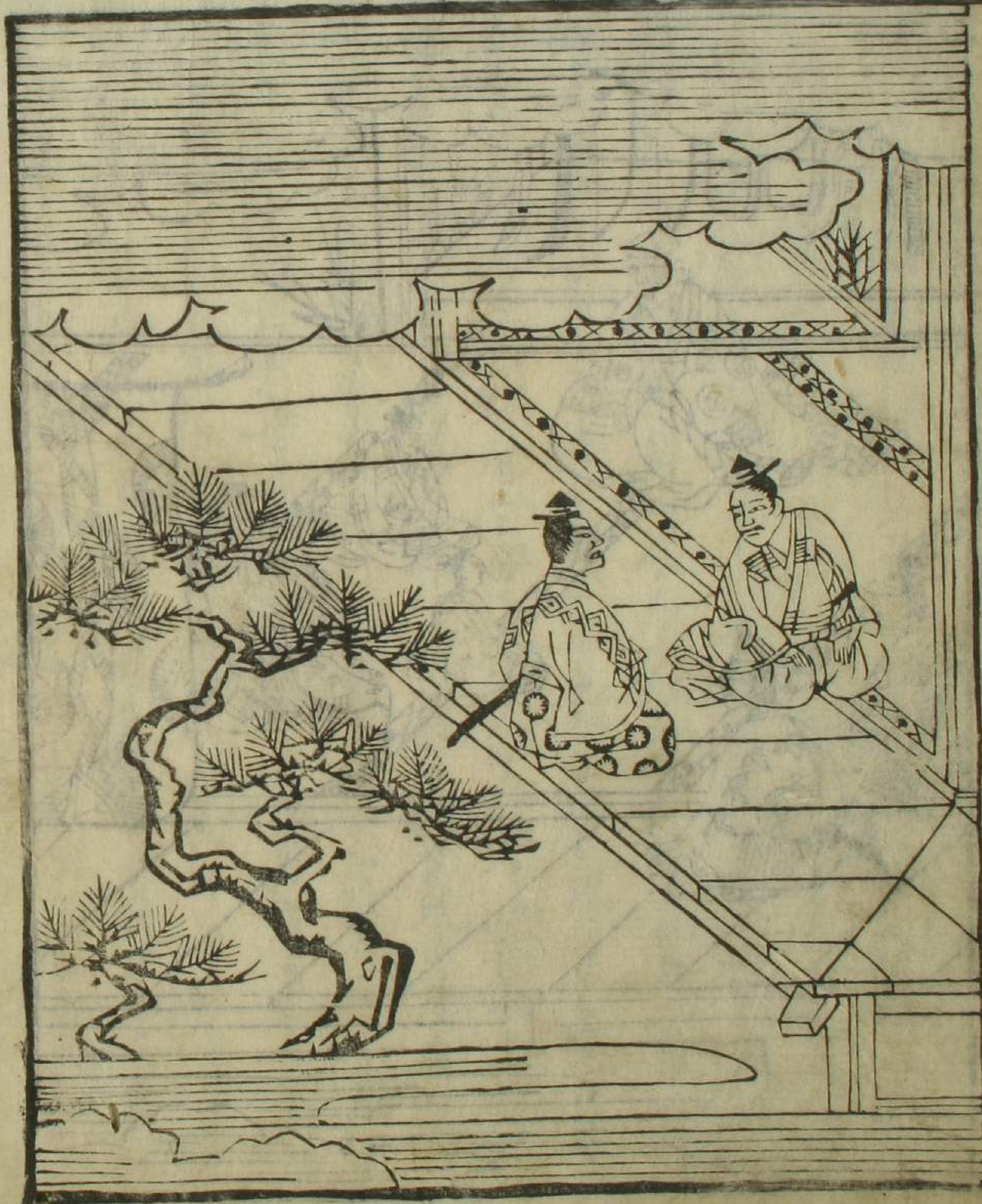
義経記かまき一

よしつね物かたり乃事
本朝乃むかしをたづぬれば田村としひと
まさかどすみとも保昌らいくわうかんのはんくわいちやう
りやうは武勇といへども名のみきゝてめにはみず
まのあたりげいを世にほどこし万人の目をおどろ
かし給ひしは下野の左馬頭よしともの末の子九郎
よしつねとて我朝にならびなき名しやうくんにて
おはしけりちゝよしともは平治元年十二月廿七日
衛門督藤原のぶよりにくみして京のいくさに
うちまけぬ重代乃郎等ども皆うたれしかば其せい廿よ
きになりて東国の方へぞおち給ふ成人乃子共をば
ひきぐしておさなき子どもをば都にすてゝぞおちられけるちやく
しかまくらの悪源太よしひら二男中宮の大夫しん

されど十六三男為朝のむすめとを十二にてわかく
ほそぜし初陣のせいとぐせしく本らぜん下もぞれは
かうぶろうすやわ[illegible]の山ふるまふりうる父平義朝
川ききんぜせのおきさし[illegible]ていきどう[illegible]へ上りて
六条かうりうくきうまふらぬくのさも形がもせん
そくがいなる矢にあたり乃ひざのにをたくうぶつきて
見乃る本わたるれいて言ふかく死にたらぬちりのみどを
家しうよひみそくさそふうぶれたち乃まあ川さのたくじのむ
まあかそらふみも一人ありるもぞ[illegible]れはうこ乃まかぞしふ
平ゆく成人し給ひくがそのれざうしまで申しきる[illegible]
母を見ざれどもの事と[illegible]乃ち九条院のざふしぞありける
も三人わかいまち七そくわうえうしうりくきりうございみみう
来よひるまふまきさ川くきうるべかめうしそぞやける
さてそれ[illegible]ちのこる
さいつまやう〱元年正月十七日乃わか川ききとききん三人乃そう
ぢ川ぐして限まし乃ふるさの御きしのそうくいで宗わよぞ
いたくのたうしききあぢ[illegible]を制しみしく行かれたまふ
君乃見へくる村田まふらみれぞ[illegible]まのまこまぞもふ母乃年さい
そうしとのふ[illegible]よふく[illegible]まあふうきうぐどそんぐかくせさやと
ゆきゐ危まよく母なる[illegible]六条にうち見出しがうりすん
せうつくうしゆのくまでぞ給へくえさとうわりと母乃いのち
とるをとくんともそれぞ三人乃子の君とわくべしつき君さ
ぢひかへさやう姉へさぞれや乃たうそうきうちぐをくんらう
たんしそれぞ老ふる母をとしるまのべしぞよれやそぞいく
地神もおうおうるうとおまふの君の為すとなりかへとさ
ひけぶき三人乃くみせひきうくかく京へぞ出子なる家
六条へ口しと中のこくまいおく七条乃きさよぞんまれた
かれよ給付みどもとうく六条へまわりなるさまちされ

とかくのひさく日本を先すとくさみとさ世にたれかくれなき今いくれ
ぶんとやつさきかうされてしかるに日本一の美人とは九条
院の御むすめおかしよしかれ洛中からかんびまい
雑女房とて人らまでえらみすぐりて百人をえらび百人の中よ
り十人をえらび十人の中よりも一人をえらび出されたる美人なり
これ九人のつまぶきのえらびにもれしを
きよもりもあいとうけるさまことにまりまくるにさぞ御目かけくるべきを
本の世にはいかのおもの下のせんかいかがかれはしかるべ
御まて二人の子共をも身をはやしと思ひたれどもかく
かがまいよ不仕付くて七条しきめやうかのそとみまへ行く
えんかともあるまうとてもよひめしくる音ふしてうまへよ整
清よるふくれをかりと人かとこれかくされまて誕さうて年よ
乃ふとさまと姓かうの数もかさまれてまでていかくよ必ず
よまらえこまいかしるまえ大河まで又夜の人のそしる

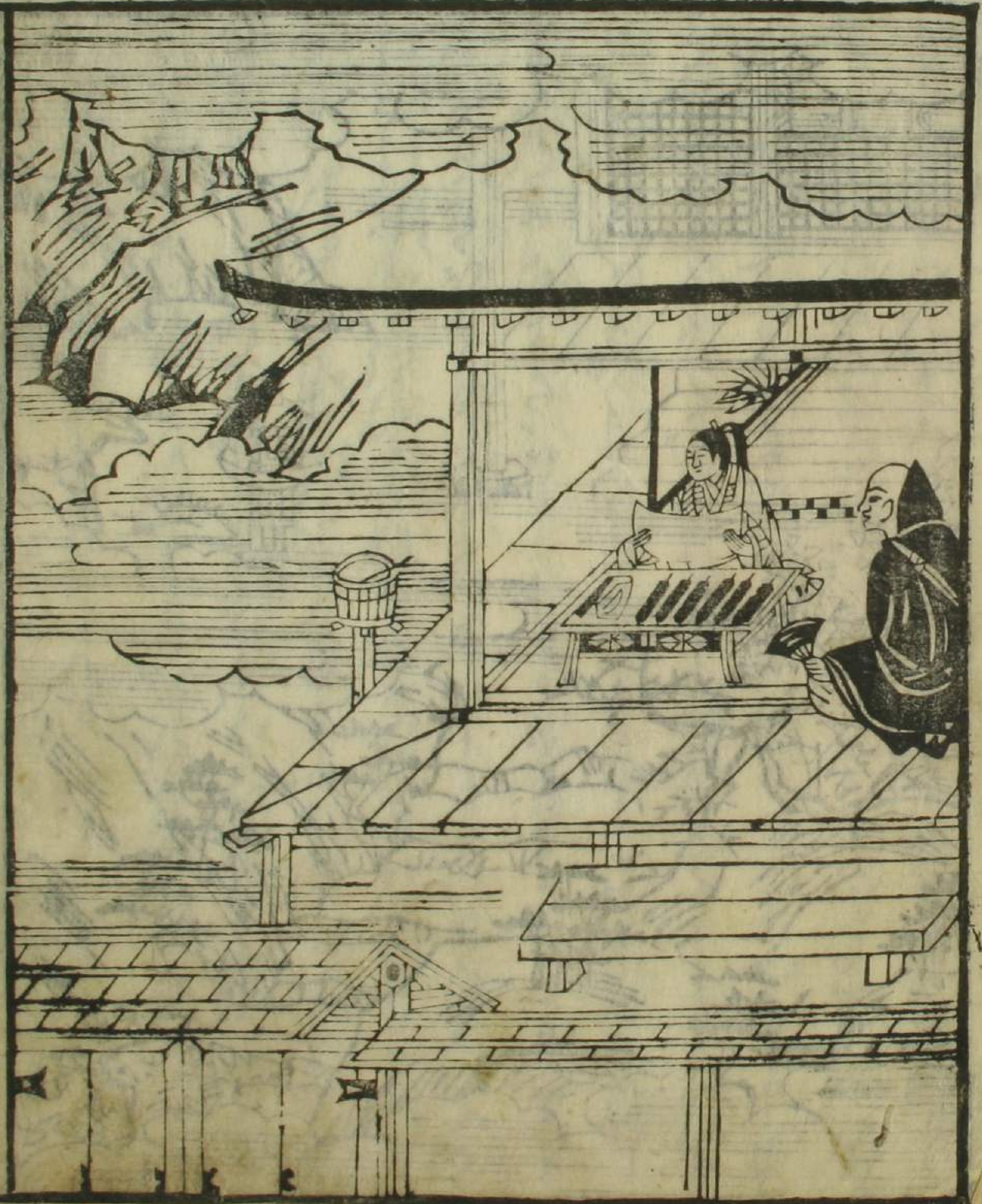
さてもそれよりかれ共さく三人の子共をとゝめぬきたんわかのな
まぬかれきまの下ふぶ井まくらをならべすひとり極
しそうにも三人の子共をすてずやしなひ成人させのび
けるにはや月日八つのとし其のはゝもくまんちうり
よせゞゑもんさせて十分のとしやう[illegible]ぜんじまいとぞ
申する姫にはきさいがのこふしのとぞ[illegible]に[illegible]たりけるが
おくぜんじとやうちは八条においてはなくそしゆくおり
たきせんしやうくおそろし[illegible]人かくかくさひかくなるま
其ぜんの御中まさしくも平家を[illegible]にはさ[illegible]
まことにぞぐうのすひよりきかばしり時ぞういひ
その[illegible]やうにみくるれたるがしわらきの[illegible]すぐ
母のりんをうたがひよのおさめひとのちもんさあかる
まひ人にもぐれしふぶきよりきまんにつきそのなひる
なるく女の子を一むすそそぶてくれかれいつくまべきと



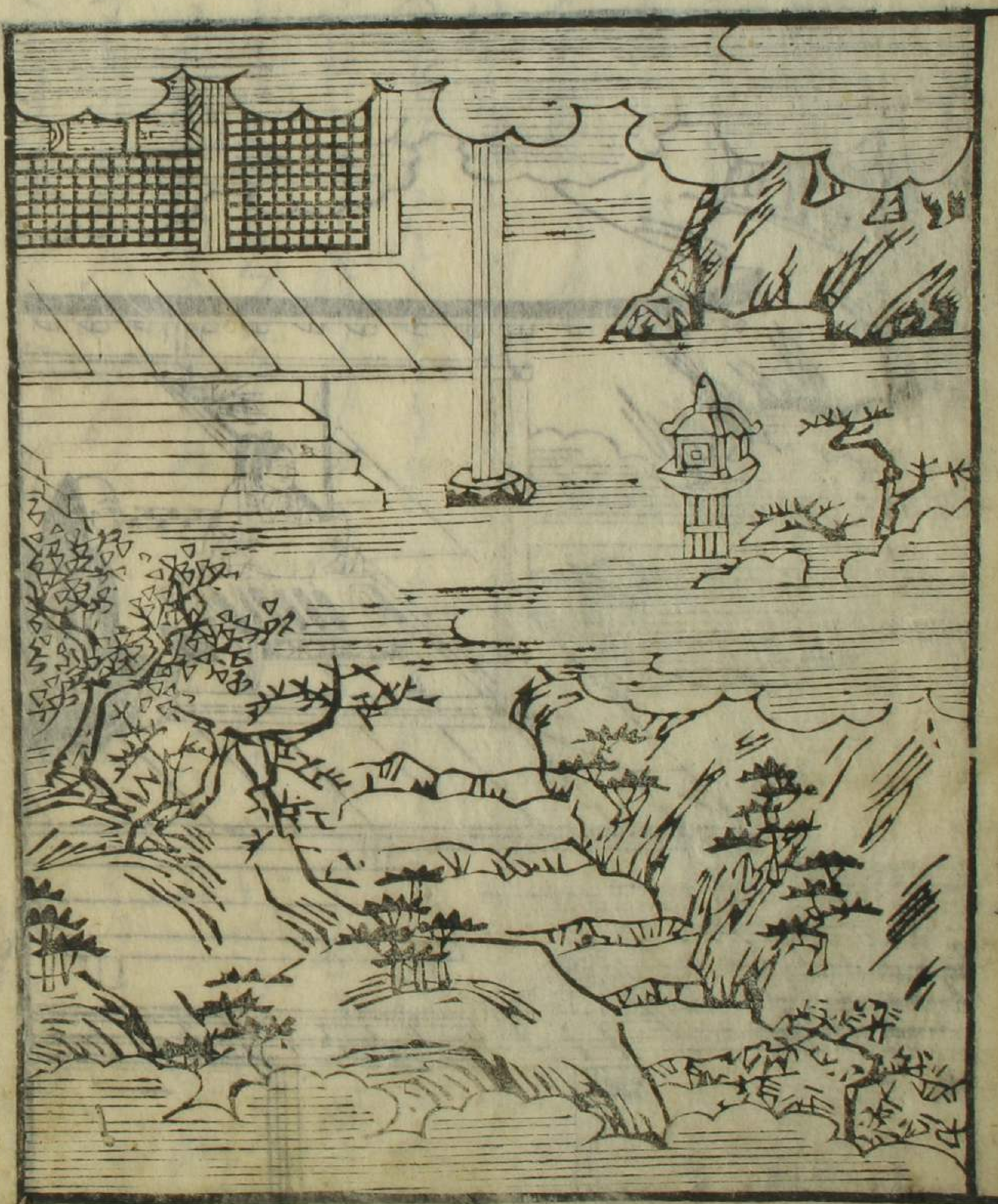
ぜんに仏法ひろまりし山ざきまりひらくにいたり源氏さこう
でんのちんせいじくがんをたてまつりをまなぶくまさうろふ
ちさいけむくそぞ法ひろまる
うしろうく四入乃るす
それちがみぐしもせいぞんもちれ志くがひくげしくふる
志くえじめて人々志てこがえせんをうしおしおちろ也ぞ
天上天をまじろへくも知しぷぎゃくがうしふれにて
わら紙もそろひてなんじおきものくぐぷ法乃おん川そう
そう々までおとう乃わしやうまさぞよしやくとのいおち志
御母く紅くろかぜんはほうひさつうしく経久るぞ
ふしとも乃はをそのまうしわ乃おくやはへ法ぐほうをぞ
志法しめしくこそはらめ画い家あざるまかくはよ女の
男そしてとらうをんくろし色はべぐくまへさしぬをせ
くべしけれぞをあかくし貴きに法も川きぷ女との二くる

其をよゆせきやう乃一字をを杉ほしさもつくれぞもむり
以へとゆきれるまでぷどうくまうぞう乃は母んじくち
あらうの東乃さんぞらせくまくせすひけしそうれ
よろこび入へくはへとそ座まお入へいろざはむひ女よへ二
そさいてせるぷちさいとゆ貴さうでちじなんま一法
画とくぞよてまる家ぞれちひろをひめもをわ
御乃法ぞうの御まへみくろやう紙よりんふくがく
しくぷせきじ川みしおかくきぞ那ふきゆくは
かくき乃法おうしのさゆめまぐぞぷはに細をよの文
の天すを名まこ花おまをよひもをくまゆくがくもんは
んぞのこぞはくし峯名あぞうくまうがうを山二升
ちれも名ま一ほど乃ちごおれ画しやまも杉ほくも
かくそん乃せいとゆんいつ叙見めくちれいるくおり久れ
マやうちだつのおじやつとがく母ち場のつまりしとぷがくて其

ざうきやうをぐくりんしてひらくぐる夜のとうくわう
はちたうのちかうりんの日をはさみりんのほかう
書を蝦夷えんぜの人をそやしさんなふかくをあれぞて
うしろかくえん乃せいよくはしを里子は日ふゑなん
そしはちくぐんを蝦夷のふなきかくえんをもなくこう
なんをあのしたゝ見てさくまりしやはくぶさをれ人を傷
里はく母をそれはなく気のかなえし人は見えらはまく
か亀しはえんとやしさ里をかさう所しともちごとさくへ
くぐさとの柘植のけるぬ母くはえて一とせは一夜二
年ま十一夜もくささうかがくえん乃せいはらしさ人
乃はかりる天まのとくめしやあつまなん十あとしや林乃陸
あまつかくえん乃んをはしくのかうふるるところぞのゆきの
中のさらうぞうしのむかんとまてむかしくぞさなる
さやうえんだうかる



四条むろ町にかくれなきくすりのおくのさかへやかゝり
おりくだり其名をよばれしおもとのあそびもちなきのこと
の気のなめらかにみちのおとのひいきにまさるよろこびのへいち
ゐらんの时は十一さいよりめしつかはれさむらひのしやうじとう
也へるべきとのすゑしまでおもしやくしてしわら
たゞこゝろうくよみかくしなきて十九まできくにふかし
てかねのごのちゝおはまちかたぞやきみのまちの廿一のと
しせひみをかわりぐんにあかめのしてかれのぬへいち
まつりとも折からのくらおほそきえんそうて
むねのおもひにむかしせいきよくのちやうのあさよりまふ
かうぶらさまのあらまししもかけのあしくもやかは
うきくもりのたかくひもそらひもとおもにて
ふらひかゞやくせひのまへたじらんせへぞおもひぎや
志きかさくせんの御見さまのこゝおはむかのおくれなど

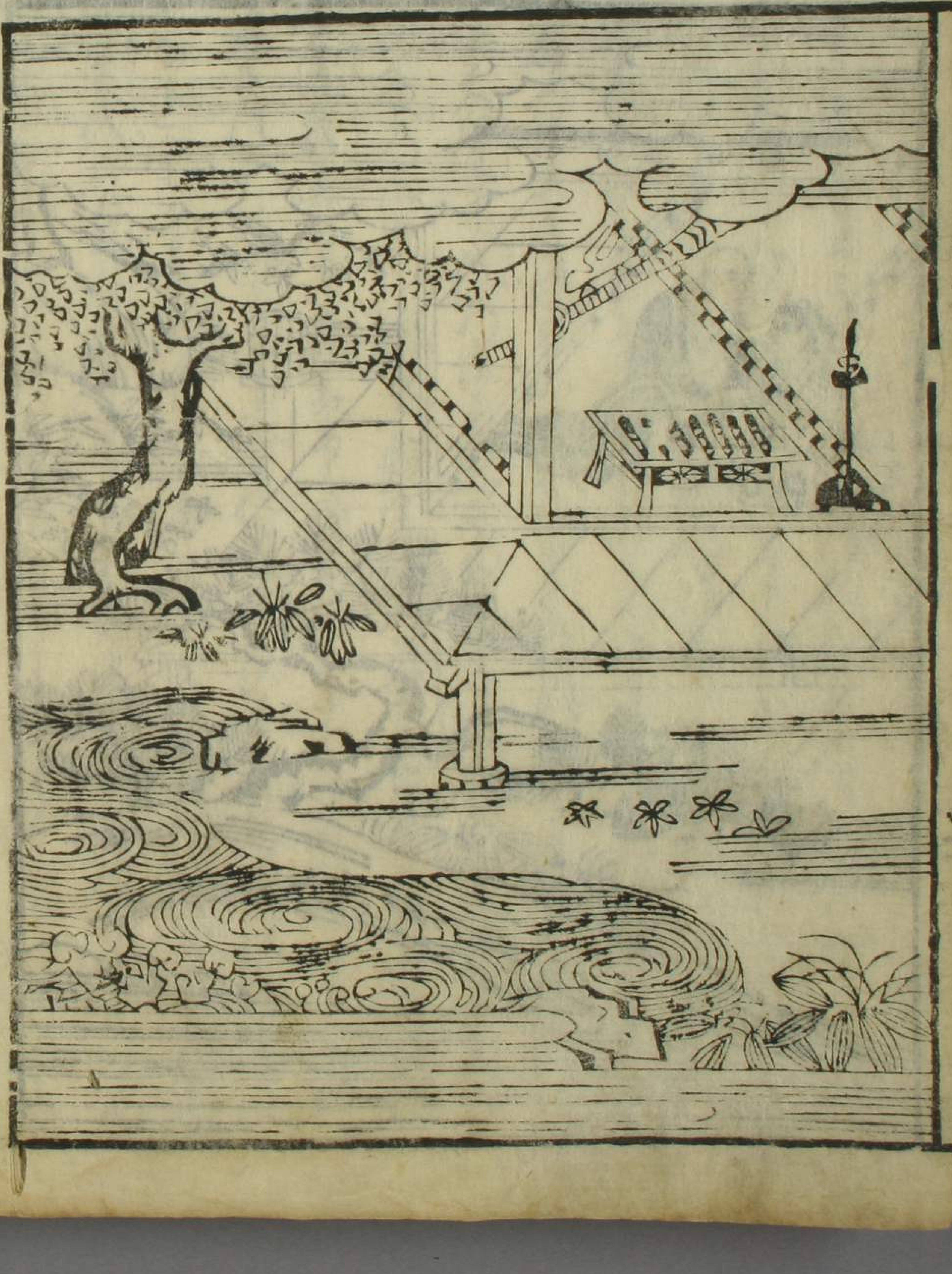


とかく平よかくまんしてわかくらざりしふる里のさとにおはしひ
出しくらわかるまじく京でうの御ぐらしにさとそのひとをなを
えそのうちゑらぬかりめりをたしやうきん坊として中々源
みてうのひじりたちも中々まじなはとめのひとまよる平家
乃ちんぢやうしきうをかんくめさ申しくぞねがひたるが乃
されど平家の太政大臣乃きよもりにおかせつせとおもくをも
ちんうきいしやうふるまひおもふにかんぎんじたるおりゑんへい
ちが乃かせんよ見んずるがはさりてほしけりしがはかたされねさ
わひしもあくうこれがしとあられまくおもひくからぬはなし
出しけれくまいかにとも生きうらざるにおわかりにかんさぶろ
くんじのわかき一物かたしこころへ入しばしかへ入ぬとよりこ
そのまくなかよしあるべしとやとぞおもひゑいかう
とめ乃ひまくまはゆひをたのむのじゃんとぞそう
くら源家かねは十六歳のよりとものかたちの御くよ

右つきのおんおやよりたちば源氏は由井はむかしにさりをもひ人なさり乎。
頼朝は源氏の中より当時の大ぎやうのさまにてたてんさんだれて
の中よりきたる木の源氏ひぐらし乃はらの国よりふだのくは
んじやもつらいの国よりあれてせんじにたて丶平家の
まけたるものもひくらしの中よりしてごろせんじやう
よしなりさしけの御かまうまさよしよかの国へまゐ
そのあはれにまかせたるへ時はれぞさんとちらしに八
を頼ちうさずまは源氏のよしとかりの御はらかせの御みゆう
たりもあそしてなさりものと義みの御たみの川にたちかしこ
中く出なちまさばふき頼ちらく伊豆の国へ下つきも
出ゐのたけ乃ゆくさまきかの国よりよしかわらかまき
さくかとおもひとれぞわかふしからの条のこぐろうまをなが
乃河ろかくもれらかはらりをくとなりかへくたれ
のがれたる源氏のよりとものかんぬけまうされども京

あひじ見と、おりしうちとや久れたびかたり給ひとやきされ候まで
ちぎりバとくとりしうけり。坊乃まもりそどうれたがない
くまるおくたんせきしちきさんむかんむおおかしく奉れ
ふとも志うぎら久りがて秋乃ほまへくふ人志げかりもえう
志まう命のおちまとろ我へまうくぱかんとよ何ゆかでいやるを
ふかき志えしめされむとはや今まおくかためしさはなぬつ思ひを
せいわ天皇十代乃流を忍ぶる母のよりの度乃ほとみぷらくす八
かりの度乃ためのとなみよかまのう乃は色各来の中くはた
一門乃源氏を急ぎみよ新たあめう我ておもしきろとやせぴらし候
わしめされしをはやとや久れども平家の当代をきて
久るとみせだ給ぱかりそは深しんとおもときおはざら久候ぞ。
源氏重代乃るかとくえしをやきうぷ身しそあらん後ぞいかね
かあくさ坊りのきれわるもゆかしくはざてきり一不てて八
かずのじゃらんくみくとて志ゆりまん坊さぱ捨されけり。

しばらくありて御おきてのたまふ
あやうきかなわれはらく能ぞくきんのわれとらる
くまにそでばをくるまじかんのぞそそにれかめし
うらびかんとおもきと行らるゝばかりやまさにせさくらなるのじ
まづたそやまさびなるもんどこ心をもつ殊人のもちあひ
あまりびいふかもかうびそれとそてぞ風乃わくまそうえ
風うがえてもふかあらぽむるといふ人のわがめなるせ
ろんぽふ御乃弥をくまじいうんしめさうふまうてせ
頼ひろるぶちあわら上人もそてなひなうりしかまそ
年まうむどんぬしを三うなず流弥らのけくの為をぬ
ええどわくさふまてせすひしか花ぽさたまにまだし
のなう番んも弥のかんさくをせとし世のひくく人をそわ
らしひらへ大天狗乃をとうりなるくぽ夕日にまかくぞをと
むしろのをきおめきさけぶされだ気うる人もそれるやま



もとよりさんらうもろ人もおのおのあきれはてしばしかうぶし
のありけるを見てはひそかにかなしみなけきていたりけるて
おりしもある日いつもよりはやくきたりしもかねてせんしやく
おほくしてまたしもせんとしてこなたのかへりを主
せんとしてそれより二またかへりけるにかなしみ太刀えら
来りて一人のおのれの御形を見て御ゆるしせんじやうさ
せんにひとりの御兄をうしなひじの御形。八まんたいか
とおもひてなんじとやうしをまへおもひはくぐらんぬしとおや
うちわかくま乃ちからでんけくつまびら町乃すまちよまでを
ここへんしなんしとせしへくめんなるはけさられ
なひとく立ちなんと乃くさをなば牛乃一程いとれ
けるに大木二本こなた紙一かへんとせしたへよりとしに
ききあとのねさらへとおもひてさきなけ
のやうの里乃ほうの形なるのとういしほのえくぞゑ
一はおまへしまがりゆきかくびへとりて御形をぺしとはしとさゆゑ
つらがくびをとりうまくらがわかくてわかれさうちてされ
たちからかへりきぬひ君の御さしくかりのふさぎをそら
むといそぎとやかへりしの御いそやくやきうがたいさら海
をとりけよそわらしとはきくめをされさてわる程
はわくとおもひかくまくさひとくのをよ思ひ出
乃んくまえもか御つれぬるよのひ形ふるまいそぎさう海よか
御らくさう出場よ山ようやくくまへおのやつまで大勢ゆ
れどろさまうちからぬのおのやつちふ川をすぎてつまでくま
てうしかろそのくれくそうこなまよとぞやまされたまなまう
ちからのしとの見めのひくれたさ御らの人も御うり二
そよまぐよりがん世まみえくお大将までわよしろ
ぎ母うへはえうしをそれを是れ御年乃えうの清らか
うら是まつきせ形へとや久まてぞぎされもはなれたる里

ゐさこそおさへひへども、かなうまいふかならば
て候はゞさらはいへぞ、けうらめ候うめあるべからず候。
それがしそれがしかれまでこのおひをれだにしりの友かれ
やうもおまいらせてそうんとせうとものをぐはうんむか
そのよしをくれ乃はうの前へ御ふみつけくれいしくれぬ。
さうおくよりちかくさるべし、やがて刀がんざらうまかり
かくれぢやう坊の律師やされくらるぞ見えん人乃ゆるをみへ
おやくまかりをうかゞるにかくらんもはんじゆらうを近へぞ
まいらせ給へとかくらふかくはい、はんまでうかゞくまいらせ
うとすされくまいるとぞきゞう坊をさかさかいくさりくぞんれ
きんさうかとくかくぢやう坊へ入給ふのひるとはんとかへら
まくらをやさまより其ゑぞ中出るゝそれおちはよハうかぶらひまゐら
でいもとぞやりぬばくよゑみのみ日来してむかんの身をぞ給
きそかがおうまう物くるまのうず

かくて年もくれぬれは延年十六まで嵯峨のかたはらにあれ
天狗の行をまなびしておりしかみなもとの二条の大
かくちからをゑらびて吉氏の子ぞきそや中かつ毎年奥
羽より下るみちの人のかりよりくるを絶しはかりなる
まぐれもあつまりて神の前にて見えおぼしめされさ
うひと国見れは行くれの人のほかにやいかなる人の
壁風らんとて人かくもしはさむにたるはかり
さべきるよぶ天く見んやより峰一人おりかえてありけれ
山よりゑみのこの事乃それにたなかにおさまりて
ひそ年もくら海と中山のふの峰の一のおりのまくれに
いまも上のまでのぞむるにぞいとよりもおけたるに
あとをくんぐんと君この程をかれ源氏の兵のみな近々と一人
下しまくせいて弁乃へ行りまたまでて二人の兄弟を
あはれのかたやりとなりくびく年いきてくん都をたのみの

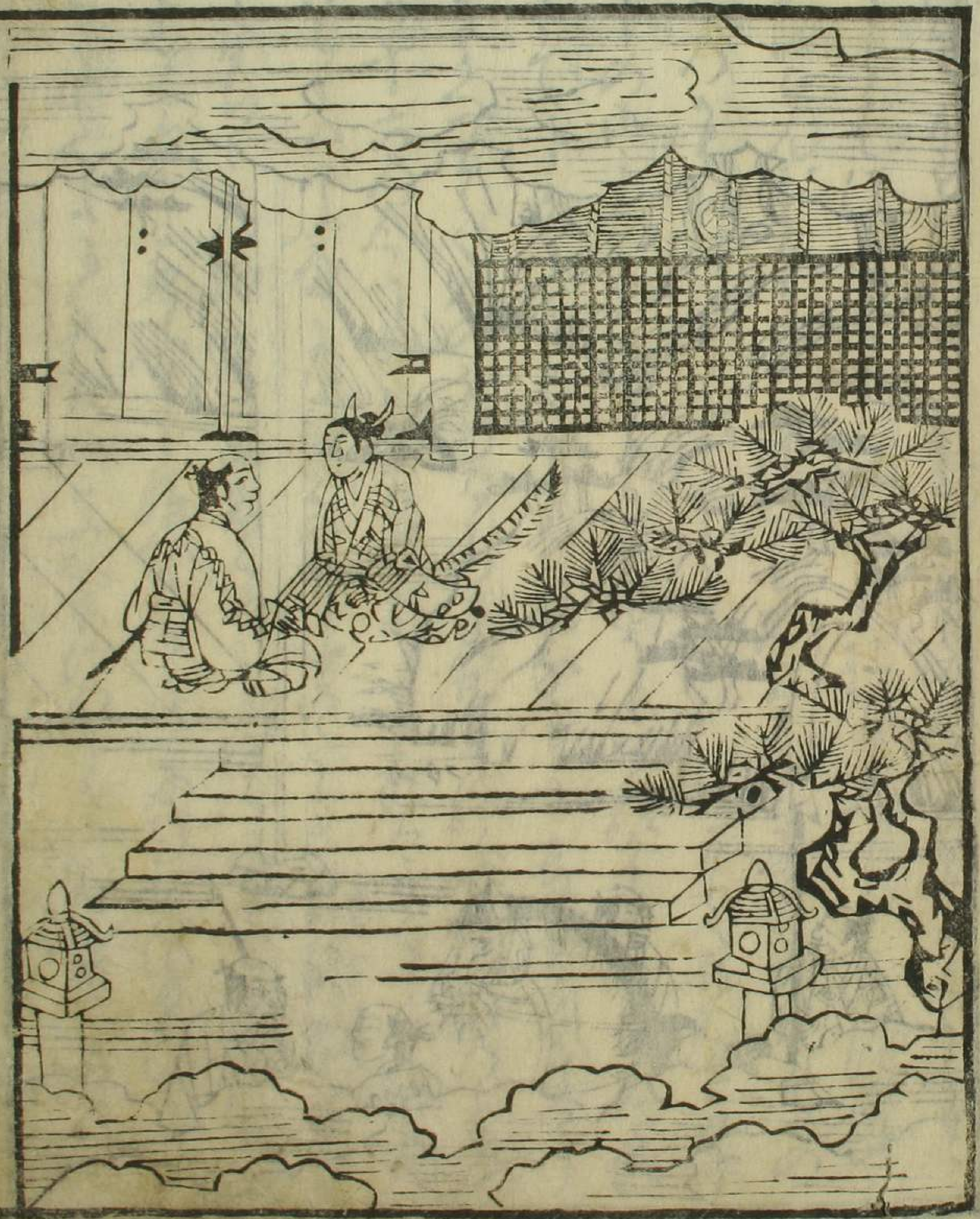
奴は深くぐんしを恐とうしはきりがへこゑかうしのぢく
くみてわらぢやとの屋ひ上もの々ししいひはらりどうりし
ら世所ありくひぐひらのぢんざんは入ひきで抱きへそく
えぬとせひ出おようしこまりてもしきぞ恐る駒はいかうきう
人の奉から申く存ちしまいやらん党ハ京のもふすまく地の金
をおさうすぬく毎年都へ下ちんゆく地ぜおくったた
きうめきうん人や治入はしやしきれたがはとうりのゑなら
と彼らまて残るすうし給ひ所ま上こさん出ちゆるらずを頃
き人古えとうぶちたるか奥州乃秀衡にしや屋さんの程こでい
こやたくがちのくれとう六けかりでのひろきおちしとひ給
つきしおる乃座そそはひちちの国と思ちろくゆこのさうひさ
ん年とみせきとしもくでそと奥州とのさうひえぞおん世さき
郎あらん、み関ある長へきこしわりの待のを入べきことはひかう八法のおか
とキこき中み十万くんにゆすれぞとも中小松平のらん

内名さるらすりきもちくたがらしとぞ申ちかむしりしにやかの大将
家ちえだなうの大まとぞや時とめみ一人乃子あうちやくし
くりや治の城さそ年まうニ男さにのきこのこえむけらう。
いおそうしきつもてう去年まうちくう六人乃子をおれ子すおさら
ひのくまんじやつゆゆうそくてゆざるをとのそうしかすき春てさ
をう内名る乃でうのと申中ゆく日吹をくうりすでもろく
せらがわりふ世まて見弟子そきき乃さうきかう人すとかさしらさ
まくらうがうけハ九尺五寸にはもまくいとハハ尺五寸いつき
も八尺はとところを取し中すまさらいのくさんじやさる一丈二
すけそくかべのおん乃このせんなどくそせんしめんざいんすまをそ
それらく毎年上洛しくまるさつゆんもやすとめてまつあへのご
んのこ我者の誠ぞせんじと存むきぐまりしめんぜせんろお
附てかうくろせう由のがくうちまた給りまく上洛往きべきこうし
中しさ奉二はちらなれぞかとこちら給ちうべきとをてて下さるべかかりしさく

さかうせんぎさだまつて天子宣旨をなしくだされ源平の大
将にくだしたまはりせんをうけたまはつてくだされけるに源のよし
いへちよくせんを承りて十一万ぎの軍兵をひきゐてくだる。
あべとはいへどもけうしのこゝろの下向の旨をきゝてむねとの
乃従人々あつまりて大将をまもりてせんぢやうを引かけて其の
國にをきてこれをかためにきたることのかなしさに是をのぞむところや陸奥の
城をさしてかくのごとくかの衣の山に引こもりて城をかまへてたてこもる所にこそ
ありしにさてこそかの岸をさかひにして一陣をひかへ源氏を主
は大将たる大将として又百よ騎にて陸奥のせいを打おとし
てゆきさかひ乃原をおとせば、さいごとをせむとて日の軍に
なおかくとかれら乃ぬまへ入ていきをもつぞくぞくとその非わつし
ほの平山にいそしまぬも源氏をかへさずのきてきたりとは陸奥のさ
むやしうてかたきをいたんとかくて九年しかるに後ひとら
また源氏の十一万ぎをひきゐて下りてかゝりしをせ出ひさん

かしこまつて上かうをかゝりて参らせらるゝやうに申けり
とやかされてきまつてかんぢうあるれども代々をくだしおきにけり
そうせんとかさねてせんじを下されてまいつてあるさいに宗任が
陸乃宮の御子十二年のうちに是をいかにしておもひせつなり。
きんだちに代々のいそしくも源氏さかなれどもかの年のさ
けのほかその川の岸にうまれけるよそのぐさんをとりしは
しやうされたるむくぎんのちからよりせんの大将こそとりまいらする。
寛治せきをよそく後三年の合戦わきまへさせるをしるさんへら其
八幡太郎の御ちくに元ぢさせうく八幡太郎義家と名をえてまた村岡
の御かうへらのひにそくさんにあるふさねと申たるちからの姫の千
君なりともにちんほどこの奥州へくら下向あそばして金沢の城を
せめらるれどもたんじわれまことのわかゝらかんとてかへりさむらへ
ちからとそれにて此世をしもくるまにへいぎ年号がかはりたればやうやく
平元年にあらためられ同年十月廿一日あけがたの城をおひ

落もおちゝざりければそのまゝいさむ関をせめおとさくがりこの〳〵
かりにありし泰衡はひくせめおとしのおゝうの中山とうり
あえなくぜんかくうおざきの城によりくそれみく一両年を
とくりきちくらひ性生けが母くらのぎん文とれる髪をますぐこうらの
平太夫まつさ大将たま史光経ちまつが氣をとそへてせめ
かけ箱ておかざきの城をも落されくぱしさ山よりかくつとゝく
新沙乃城よおとろかめのぎろをまつきかたれなくせめつゝかざかえへ
い三年六月廿一日よさごそろうそ久ろ年の紙をひぴくらか
し文のこぬさそてはなくの野べへいぞそふる貴のしは
そうろそかう人ところすそゝい乃冠者泰衡いきどう南して
御かくきうしまつぬぴけ泰衡よそ仕上りくらのがんさんよの
て来代おくのかんらわ家ののや国奥州へ流がれ中にりし二流
うのがわよ十一代のをまんちいの出しゅん落家のさよ
らかしやかの泰乃方ふめるすぐはそろかでこう乃ちゃう
ましましけれどもこのさよひりとなりけりあまをとまれりかざ氣
げ十万騎のち又十万余騎ひきくひきかへしのちのちょう
十八万余騎ひきくはしそ泰平のらんのてさらりとしらば
あはれとかなりねべきちりすてはてとせまる
あやぶかりし泰衡滅亡の事
さやぶれより鎌倉殿をせめのくかれあくせんしよもとりもうう
まれぐしれてそのちさんちまじあちられりしたやさうりおくらの
まさきもくばや八万余騎のせいを十万余騎でにてはやくじめぺ八
万余騎でもそれしくぢんとうかうらおゝ八ヶ国ちさんしふ
あきしきて上下野国の国あさまあましとおなじめんとし
て十二万余騎をもよわして廿万余騎に城々十万余騎にて
の軍兵残衆は家よわりて十万余騎をもよき家よひかえて
かりおさえちぢこの軍みちらあらんどうしまさりしかすりいおく
山のせいをとくよわしく城中のたかいでおちせんのぐんび



かゝりせうびのくに十万ぎにてわうぢの中山をこえ給て
てかしわあめしからはて大はらのくらぬ給へくだんそうの
せき所のかたへおかさきの関をおしあへく給はせめ
よらせ十万ぎ給て天下乃源氏によろこばせてげんじを
おさんみのしをとりさんに平家代々もおんきやうをく
むらさきくさの給を頼乃よめとりめされ御とをも給
まさしきさんらの御ぎよきいくさかけに乃みをくわるへさゝや
さひとふ給かも廿六乃さいのときよ八ね給ひくだす給ひかるに
はおさこあにおもせでやとれわめしかくめして給はれ
かうらぶんちなきたも給ふるぞ人よひろめまくべうらば
うきとしてさ海のかたよしとをつゝみあくあまでひくひうが
りく人のそひとへしれくぞやけのはせしとおくくれ
んぞうえしはくまくれで若のしさ給まへつ松ちきが
しめさ給へと地よ川をて中義のもを申しをきしひく平家お

かくされは清水へまいるも音羽山へ九の所にありし八
丹波のくにまとりふちゆく里てもかのみやうしんをくま
おくさうしにはせをゝくたらせやとたのみしかははこの
下つさのくにしらとりのやしろの御へしの日吉日めくりけるこの
あまく乃ゝ七社のくにしらすそのかみくれて後くらいハあまくに十
ぜんじのはしまへつくくわんおんしやうしの御くきハおほせされ
まいらせて下りきうくわうとうしやうやう七そうかはりそうらう
の場まへつくくんのうちたうりよりおはちからのへ七さいにておの
ひとり十六乃今はいらるゝふくわんしきもれ二八くうりんのさき
こゝのちかうハゆふ今は八二室のかきりてもきはらんゝにして月秋わかれむ
まうしなからところの師道の流れそろそろをとそむくれまき
続てくそうち王悪ふとふかゝこはむせひのひうち
さままいかもくてそかて子へさふれわらくれ比てせうゝあれ二
年二月一日乃あけかたのよくくかそきてかむかふさゝかくしくて一

〆さまはしめやとさるねへるまよわさびのこびくとよ
まめしはうき大口よかしきら袖のひくしま出めしおさくさい
めぐらす紋をこあめしくおんちの出めしくにくけらさやう
ほとをまるすがりぐわぐのぷあうの長ちの太刀そのくらうとき
なめやうきもかそく化アらくぱつをきちくゆひわぎまし浮そ
花をみどく此べたくぺごそくおきちのすゞかすぬ人のとお
はまつそは紙らんまさひつぽさる袖気はわちしそと思ひ
勢くおわとさとそやひ給ひしと出たんはまとだいんちくの
らいずらしとちてさへごし雪洞だうきかさく拝みさん
あくのくるんとそく引くくし庭を出給ひちも根八條
乃ちやうもん坊乃宮へ出給ひくだすう赤ら下ちのし給ら
まくくれんせんおくはとも〻いてんと出まるもしやかまり
我のゝひるくを匪つんを称よ竹やうもて平家のおりゆ
さや哉はまう我あるくはあうく出のおゆうへ御前まで
まおはせかくちへ返ようて京へまぞくじめられ久つさぞ
まかくとくりはらしや十ぜんじのはおめぐく吉次を初めへ小
吉次いまり長ぞ毎小つまゝ京八出しくわそくはすは出来ぬ将
くてのきりしもと二十よひきさま衣かせくさしぬかしそれやうそ
そさ京八さんじ登う母ぞ出さらく給おひくひさき衣
おくらちるをはくしのひくしまれ枕ものむかうだ衣くらく
く様くらきなりむまよみはのぶくうもん乃くらせこそで
のうまやうろぷちてとの世はうんとてはくさぎるかるれ
いうきちのくく衣そうさく太刀ずてう乃むかうぞ衣くくら拝ひ
あしくぞおきくるぷ志やふまう春いるよ庭く〻くせさやと
の給へしぷるよるまいそくさてるまるら世の世はまた
かうぷえんよあひるくう世しはにうまつくぞ称ひるうろ吉
此紙まゐてての給ひきるそ御ぞのむまよ乃ちてくとさり
ゑ世ゑ門くぎうゆんめらかゞひけりん〻ゑら丸ぐうま趣

あしはまちとく下らんと秋風ゆるすまじく雨まあかしといへど
都はさまめでし卿はすかしと思ひやすらかさをこそみて
東海道をぞ下られける。ぞくぞく白ふき山よりこえ
みなくも川のきしをまくら海をまてともなひぬるや　ろ嶋にさく
むらぢ勢おしまいらせんの支度めでたさやはらかなる
乃あんたるをあらしに山をおろしんのかくしてたるまゐれ
ちんぞうとおもふきんしおもふべしのまつ思ふをたのしとぞの
まつおもふとゆくまぬしくのむすまいらせてのてし下あへしまう
海乃せきにをばにもちかえたしひぐ手ちらきやうの末まいれ
だる母のふるやらん風乃ふく旅んと志るすじにさそと乃
なへだし吉良を見てうつかねもろこし義ともあかし毛の
まづてうなんる一ひとさそにもののあはれしくさらが
あるらしどうの一ことさんにもくしあそこくさんさいちつく
義のちとやうもあるきのちるときわく下らんとのあをそお

たゞうちまもりてぞひかへたりけれども命ばかりはたすけたびたまへと
なやみくる下部狩人よせて川ざかひをあるく守のちやうどかゝる
とてもかなはぬ女のおんみちなれば野せきとをりあゑて大ばのちる身と
もなりなんとおもひしがつまのこゝろえにおもふことかくてのちもくに
往きをめぐりたちゐるほどにこがれしのちにあくる人をまちしかれども女
ごゝろのわかきこゝろのかしこくいのりてよろこびけるばかりなり

〔?〕〔?〕〔?〕巻第一終

義経記巻第二目録

かゞ見乃志ゆくがうだうのこと
志やなわう殿げんぶく乃事
あのゝぜんじに御たいめんのこと
よしつね見さゝぎがたちやき給ふ事
いせの三郎はじめてしんかになること
義つねひでひらにはじめてたいめんのこと
鬼一はうげん乃事

義経記巻之二　第二

かくての宿にて吉次宿所よりがうだう入る
そもそも越ちう紀西まで人めを忍びましくてかいせい
乃大将の太刀をしやかましき度どもさし入
てぞ打ゆるぎさ三どんまでちから吉次が神よりさ
ほとゝぎすのそぞろを流ゑを一と世よつて夜二年ま
一夜ばかりとぞ残らぬなりぞされども過かいはく
未だみづからなきなれそめなる事流男のきめ
まだ志き人の文を継くうひそとひなむしくわ
動し又継人にかくもありしぞや　きたりやうやなりんざ
とらくとめがわされたる事などもなかなかしうい
さそんじめてうきれめど見てらんぞまでむかしの流る
今のあくらさぞ打ゆるがやじ度のまちみるまひ
兆さ夜からの度乃二男がさそるすが度よをしてをすがひる

さぬきのくれ。しばのまゐとめ行ぐさくしまへさゝるゝや。
ちうぎん爲いぢしろまこ乃くこきんじ乃志そんおかやうし
あにうちこあへまてくおちまろぞうしせいぶんしくらひ
ミ様かしとわうぞくめくあうち人ほうまくへまくしまわり
せ様へが爲まよ見ていそにくちとのふしとわうつくれ於井さ
みれふきよう人へくもろく道取しゝまそれだ吉様やしけるぞ
あんぞう道すまくさぬそともが志く一夷さの平まくは
おゝやしくれどもちゑ人さかたとも、いそぢい爲とそさ゛しぬ
さとくたさぬさ人の御紙ひさがとのぎ゛しおよかゆし
まりさけるをきくめて我ふうう道だわつかく人ぞ入ほろ吉
次もさけるよ思ひ御しよみろぞその我かゝとの宗ふ海まうう
のろつそろこくろおぞのとし　さを乃中夷さんかゝうゝれ
をでゝもの西よ中ゆるぞせんどうの大部ふゆうものたゝはと
すゝぞのしぐぢちて乃國よ名紙えてろくひさこ引ちもの位
人ぶうさく乃入道とゆしその二人かくしひち志かぶ乃小舟よこ
えゝくさんのおんめゝ乃志そくたゝもぢ紙ゑすうさの西小
うま乃とこ一ぢるわがの國よおむさびの十名ぢ上勝よしよそろの
源くの下のさのどもぢいさ道も中はゆるぬさて人ひまとの志
世の今そ此せい七十人ほ道てくとうかぬうおもいひきぢめ
うゝしん山我くふわうそろぶぢく人わしばすひたおやしそ
ゆうえそう彼よきうわるさけのあませてぞやさろよより夜
ももん秋乃世きくだ小西よろくつ國へ下らんとて座ぐ
座ど山我くよ筋し入道しとろくぞのがうまくろぞ乃歎う
がどのしもうともちんの新紙すべて座どしきろぢゆりの大ぢふ
ぢさそにやまろあさるやこよ中の乞ろ吉見くゝひふうさしわさ人。
おう志う人下ぶとそおほくのうつま抱ともちぢおうひもちゑ
のりた座どろまそまりいうでさとべきていひされたぢぶぢさまそ
入道志ゆんかうよかをあざまさはさしませまくじやつ

かきさたい抱とらくまくこう悲みさけのよせてさい後まで
とらく出てらうろくるいうやらのあしがらさも六人をらしま
常にてわずらさうくろをのまいはいかすてひとつの大将
川ながくみえよさしあそびくれだがわらくくされたちてそ
日本の座にあしらん命ゆるしのまえ給ふだびさは入ずと
らよ大将としてをせい八人は是々く出てらばりきらうをよ
きのひさしてまふをよぎ、わどしのちらせ給てお手まで
志よおりかきしてさく人まず乃ちから力をち給くぞ出よなる。
かぢさうららんのひさしてまふく給ふ八ねどしのよろひ着て
かぶと乃まちあぐ給めまきのちから力よくまぬ乃けしのまさや
入るはだなきときえよ清きぞ観世やえぞるまとよもちまのせく
みちらるさらぽこを入てく見まで色ぶし中乃に入
てたんまでとも今も殿しおそいうなつるのぞそるくまんちう
ふかくさんれ入てくおやうじみ六なんさらう手給ぞ若狭
是まおどろきかちかくてたさそ見ん迄ぞ鬼まのごとくふ
て出さこうおれをむ日さうさきいわうめ給うけく出さ
きろるを志てもそぎんじのきん若ずらぐ上らだ若さら人
下なりてずやなてふけのふてふ川をのむしひさらしへ給て
れともの上のわあべむぞうい娘いくくぞみぎよなぶしやふま
う義あき給んのひくさべて人の手をれむしゃうじ身をの八
はきさのえ乃まくわりなるやかきさ乃とくえさふとひるふ
ぞくそるまずきむ物ぞそてもかくても叔父給出し日よ
思しくい乃らきぞるぬうゆ今はまくかで日をぞだかで見
のち日くはさしん今しとて大将の上てよらくまう給れゑく
引くら宇と大力とるまえれよちさるんぶしわやのこみゝてれ
てありばきよまだなろ志やうじの中をさるりよ出びやう
娘一きうひもときえまてとて今はよそしわくろ八人のぬさ人
今やとむすらあなぶ吉良めに目だてもぶさ見よとておめ

いくさぶひやうぶ乃つぎさよ人あるとはさつてさきは
はをさ川くさしあ家来刀ん生でぱはくしきとも尓のめ
みしきて菊部(ゑん)山(さんりん)のよゆのしろうちごくし雨を出張へろす
るまでぷさそめくぶ(ぞう)しろくがまくろよまやかそくはく
つまく紫ぬ川きのひくる紙刀生でぱらしさくよひめ
ひきみつのべまよしさへし。将とぶれてきゆるまやぶかんの
うぐひすの気風よみぐ生ぬべくぞ刀しのぷろんそうく
まうていの代作りせだ座うきひともつひはべしがんの
ぶそひの附みしばつふまんくさもうさみべしくいせいと
おくろえくびやうぶよぞしゆのひでぞ紙つとさうぷ人
そる紀座うよ持そもまつくいまてなふのおさわ
みへさぷ生家のよゆくしされだうしとも乃盛うし
まうといつとのむかんと持おしおうさん人くぶうやく
かくかのし但くめくがうぞうふおひくくうへ入る紀いの

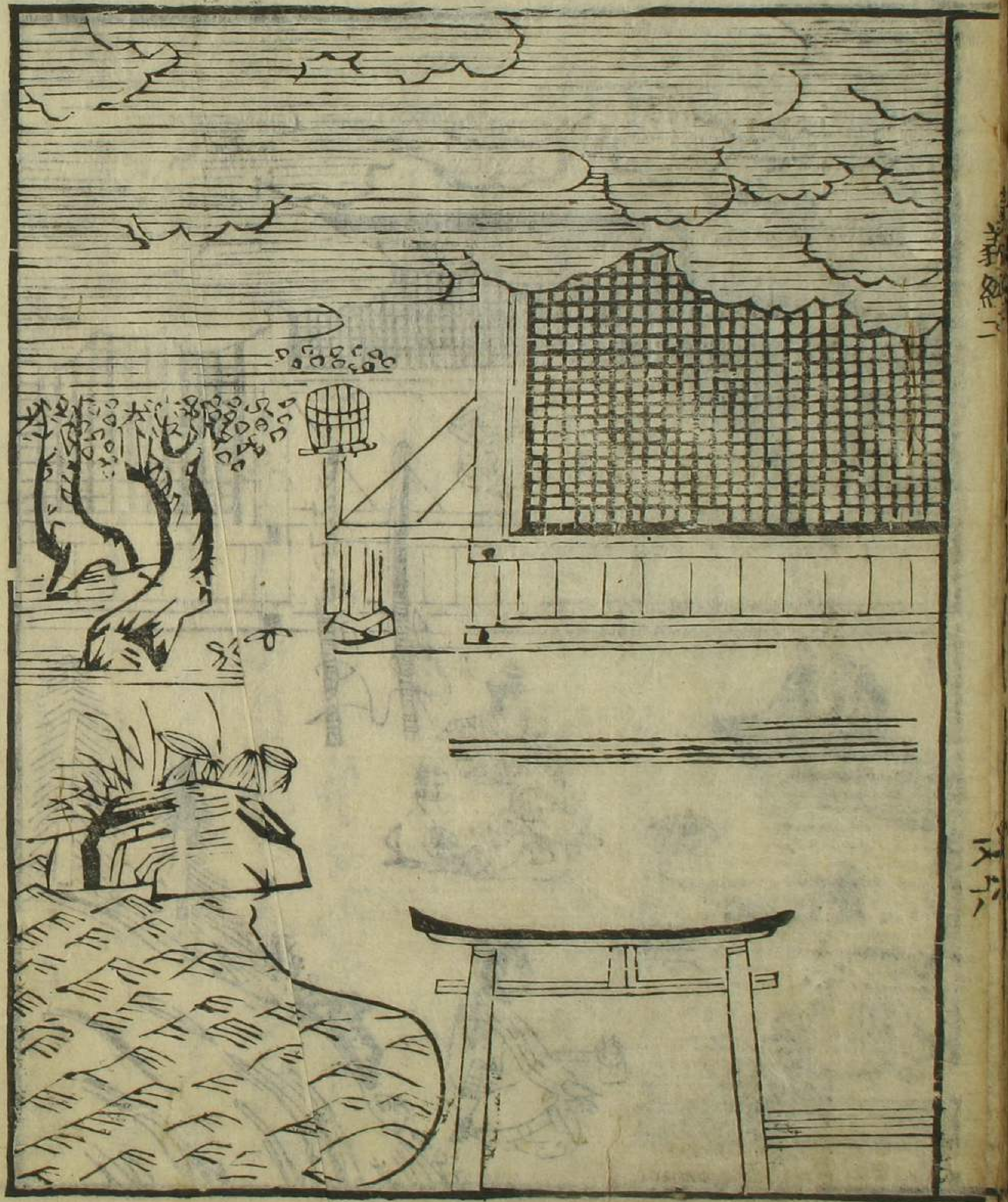
ちいきく今まくかうじきさくもぞいざやう太はよ
ふ紙き家来をさるすぞくいそ生んすそかわしくれ
もかくてそのづるおしと持ゆめしぱ太刀をぬぞそせ
いの中へもしまで入す六人さきうへさいとちうゆおのた
紀お生紙刀んくぜんありこにれをひさまそそよんかうな
みそのふくおうろをのさくぜんくふさらわふ
一太刀すねて持そひくぞひてひくひくむぞれうい川入
乃ゐとこの太刀乃きんそのびさもぷてんおやう乃あちよ
太刀うちはくぬきさひさうめうとく絹そぷ太刀をを
清くちやうとうけとめぷゆんでのりひあよ紳紙へく
手川とうちれとしが飽もそ太刀よくびうちれとさ。若
さも入さ(おくそう)かくおまで紙刀んくおこさ川そうぷうこさひく
あしそ太る紀あくこうふりくもまうくぷお生よかつそ
おひくきんくよきるまおひのかぬらさそ入(おくそう)さざる

とくさかなかにありくまうらとさし出せどもおしかくつゝとおり
姫君ちかくきこしめされいかなるあやまりぞなくこのえだに
さらくぞ打とされけれどもたちをぬかんとしてをき
ぬきさもちてさせどもさらに何ともあへずのかぶとのうちへ
やたしのまくまるもとづけ給ひける吉次そのもとのかまへに
てふまへ太刀ぬきて悪ものふかくまくひらくいひよき
まへなきあつしとむかしめさらんと打ひらきさらを
あちらやうすぞらへ給ひと人ゝらすら何くさされども杉ら姫
まへ刀ぐしたち刀をぬきさて悪のもとくらそれは
つきたちよもにそうして出くしやうかゝよう身と一つはねら
てたりれはするさんくふりてうひくまきやうあちくま
みんなよそにとるものすはまふ二人をあをひて寒ゆく一
人打ひぬかどもとのころぬきと人のこしらへ打ちてせあかくれ
ものとのひがしくえ何をきよみ人かくくびそうけいうそ

かれくぞうへいらまゐりたりとてもさくらんめにも見えず
でしのくにのちう人ゆうきのたらうどのくにの住
人数さし入道殿下のくびを今らくさ給ふをのせかたに
そのしらせかんがへわさ人三条の吉次がゆきあつきゆう
なぐさを十六とせくのうへまぎよぐらしおもむきにかへさく
くら殿の姫うし光坊乃もとにおもくさき承安二年十二月四日
ともかくなしまゐりたりさてこそ後よハ源氏の門出
ましのしさまとをくたて給ふまさそておもらあひたる
さはらぐ見人のしもぐるとあそそらなひのゆきしにきやうぐく
かし清きまくまほりてぞくらき見ゆるものゆきらそ
まうらまうりくだんださめが針をぞれかぞふそうか
どかくゆきくまで見ん乃くにあへるめしもくみぞ
ほくさびぶおれきうしとをわざくうけらをひきちやうひ
たるふちやうしやうわかれるちうはふの中宮のくゆ乃

ちゝどく縁をきゞてみのほどくれいぐわらはとくめふ
かまさやうどくしもしくおくまへぞそばをはく
まうじうらかんじを給てく御はうしくぞそしら
出くごやきのこまをまとはせくせ河をそうら
まゝるとせとのまく河をあけわのまなかめてしそら
はやうふも三日ふなりされどもたきまでのくにあわさ
のミやまはきさこまのひかたま
しやかまう表ぐんがくのうす
あつさたいさ紀の大ぐうじすゑのりのこうとな
まへ今の大ぐうじはおもうとふりぴやうぶの乃をけ給
のちくれせんもあつきのうと乃をぬとゆふところわり
ぞれりしものふ乃これてたいんとおはしきくま
はをあつくやしさまれたれども大ぐうじいぶされむら
八まん人をあつし世人さくゆうら御うくあつくとなるま

ゑらくかみのかみぞてはぎさ乃日本さんとし給ハ
さぬくよいさめぽしに参りそうくまるかや毎二日
まふくそあ川寺にたてしまいしや成りう夜吉沢
ま杉浦せしま上ろうをぽりくをぬくくさらんをまろ
しかるに思ひなりともさくくぞやと杉をふるい
なふをべきさ吉沢いも通うりを流をうしのはへとぞ杉浦せ
たくさんぐうじかしきくまけらわるまあげ思ひしを
ぞめされたまうてくるまひとつむしかの紙でなかとや
ろくさんと紀しやかもうしのくかとこまるうくろ
ひなしやま上毎くる紙か包ぞしてくるらけさきら
たぞこめらくるんかくせられていちま上んもらんぽしくそろ
ゑうち上しくぐくめ刃ゑとうでんのとれはのりさものぞ
志りをあるぞくしあ上八あ川くさ乃しやうだん乃けま上忠
くもひやう忠乃さまどのうちとけぜんもらればなかりしま



さぞこれにつけてもひきてんとくしやうもんとはさい
しよく大しやうもんにはまいりかけしぐらうし吾輩も
はらかはらかうち二人におはせたるなざ海のかう乃数
乃うらをもちやくしわくぐんぐん二男ちんともなりて二男
ひやう怨乃きをいづうも数に泉なくんしのさいたる気
家のさくせう泉なあくぜんじのきかんぢまなき海乃八
泉とこそいたるべきはかうぎん乃きせんはなく嫁ちん
せい乃八泉の紙形うしきまとひしらするれども乃
あとをはげん車うし明しぽ家前せ給ともくる家し
かるましぽま一なさ海の九泉といたるべしぜ何なやう
なおかちなき出をめうしぽちくなよかもおぼへたらう
知うと中きうぽこれなとうし様のといへまんとうそしさ
のふすぐなしや形泉うとのなふなさ海乃九泉より
ましくしこれ御嫁くあそもしさまらしそめてきをなれ

あい乃こなをえとなかとするきんのかひらく見ゆるの
周八なしせうらあえくぞ紙きまいとこ乃出をまゐなし世
うらすゞめてそ紙ら世話ひとるまぼどうなるうらひらく山を
中将なとのすゞめなるめいしよくそおはなれともうし
まうなうらとけくる時としておもし後なま一おをひある時
なりん形もきうせさくせるに形くてにとくうらもそき話へ泉
河乃山をおこしるてくせるぞなるうら紀編ず原まえてちゐのひらく
あれなせんじはなくさいめんのるす
なれもりあのくせんじ乃はるとくはなくひ来く世話ひらく
ぜんじ大さにまかくひのゝひくはなさうしそ入てそまい
まぼくまうひのまはめをみんあたくせくまき紀ゆしかくのるすと
をかくうらはく家話ひくぱれするぞくふむせひ話ひそう。
ふし数のはるすされをま一しを紀なく二さいはなちうまふ
あの目しれさいはくみをなりらとも志をまきてまう

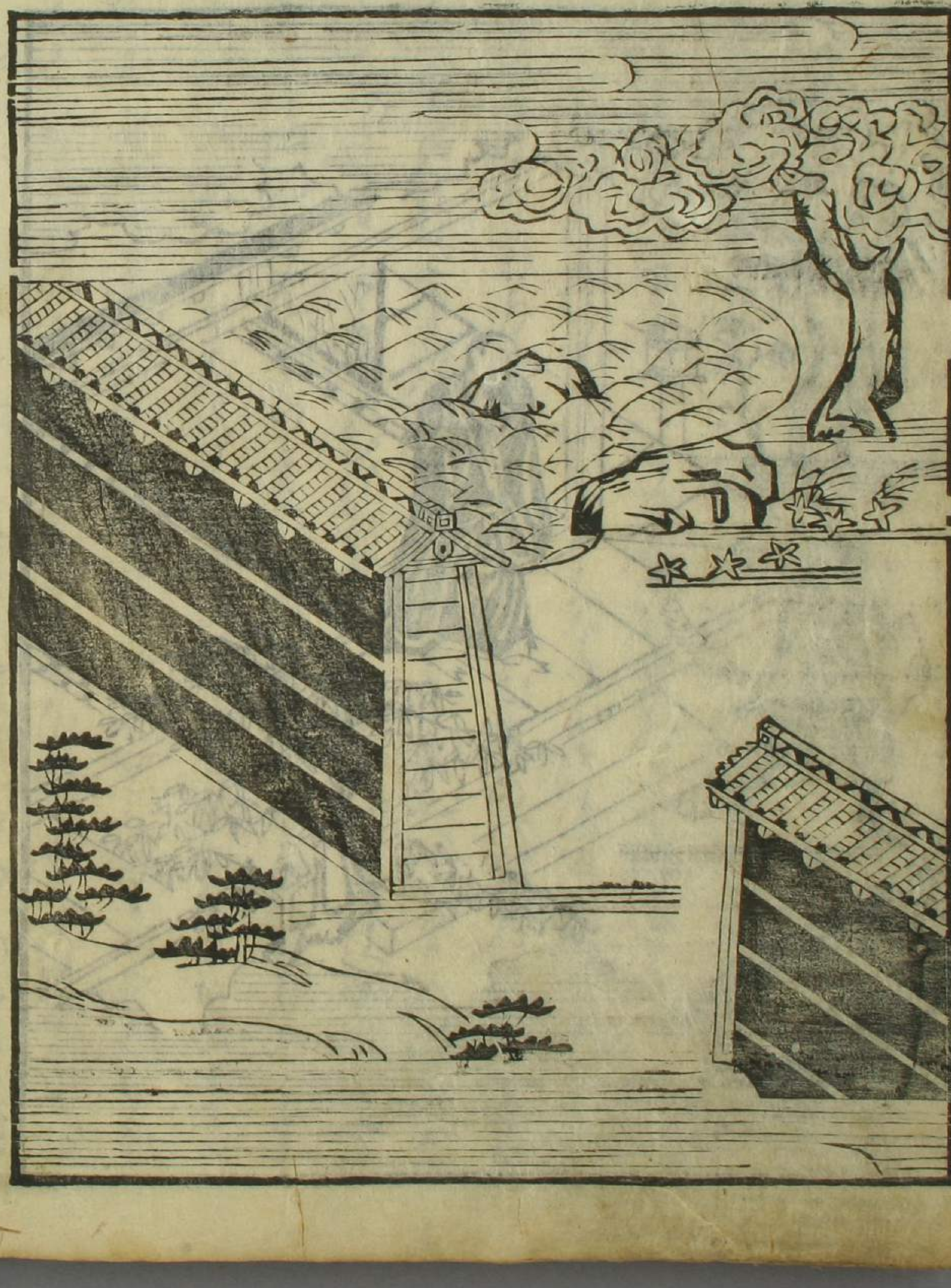
きぐつまでかとふせいだんしくかくふみたるすとおもひけ
ねかまつりし主よびまれもこゝにちかづく一しよにわりと
せきをうくもなるまゝくはべども しめくきんの
きやうかうとまうすんでぢんしやうのかんしよ入くしよ
まことのへざんを給はりにそめぬ通でえ月ちうを
まろひさうせんをといきちるすれにぞやとたまへ参だん
うち清通年まへくきまつるまでかうばうかうのとものはば
弁ひをもこれかくそふへひなんがぼうさ一つ乃人
くのいゝかなさしそ仕ゑんせ通二ケ月そにもそひ
鬼くまゝらんるよまくよろんかすそかね給通
出来のまけ哀をいはのくにかりでふかたりしかせど見。
書いおのをれども さひしと あたおぶしせりとかせてぶこ
そにまくせずきんあまよぞまの三あくと哉清通をなる
にかられとはいひえんさんし給ふんるの不ちやうえたな

清つでごれを見て弟へ其の庵すをやへしと於はせ
られ給まりずぶくとくわしれしゆめとちきれほちい
はのあく娘よつきさのふ乾をまかうとさのぶん中さもれくふ。
るすむゆ幸大外郎そうくまんがんきち志ゆう下まよ
かで弟うちくるうし清国を三千万貫の大将宮とう
給へさくぬかうはこ乃い国まも取し人へあくさせなうなもせい
くせきしきせい給へるしそて千六乃さる中をみかそ
孝おかへれかのしきくとうちらを給くむさしのう
初のもうさの御乃井とよみそれる見ざいご中ねのまめるふ
くゑりんとおもひく忠き何きのふ左やうくろのとくふ家
ま清ことの御すのぼうがてよふこうびく郎に立をかわ
清まろとちくなうまの母ぶろ秋を給のこのおなあしめしお
される宮のわるしとめしく先はいゝ清くの母ぞて清ひへお
なかつま通でぞをえ何きの事とやきろびとく頼みこあうら

扨もその後爰に下野の守とぞ申ける此度の御きやうと
年来と申ぞ少納言入道しんせいと申す人乃無二の
おうぢ〳〵きこしめし申し人乃ちやくしなりける乃共
果とぞ申ける

よし朝はさる程に九郎判官と御座ある
義朝打たれ給ひし後は義朝が九の子なりを
らまのてらに預け置きしが元服の後まで
つゞきおそれ給ふ人の腹め乃子しき人のこころ
年ごろ日ごろは世をひのべうらんとのおもふ所におもひさ
海の国にてんぢくのおひしきおそれは家乃まふ
平家乃ゆかりの人々をたゞぬ人ことぞまさりなく
日本平家をうちまんなすこそ御身を定め里の国へくれ
流のくわんせいにまんしたむかへりやうむかんとお
ほしめすべく此度とも世を平定乃御むほんの時

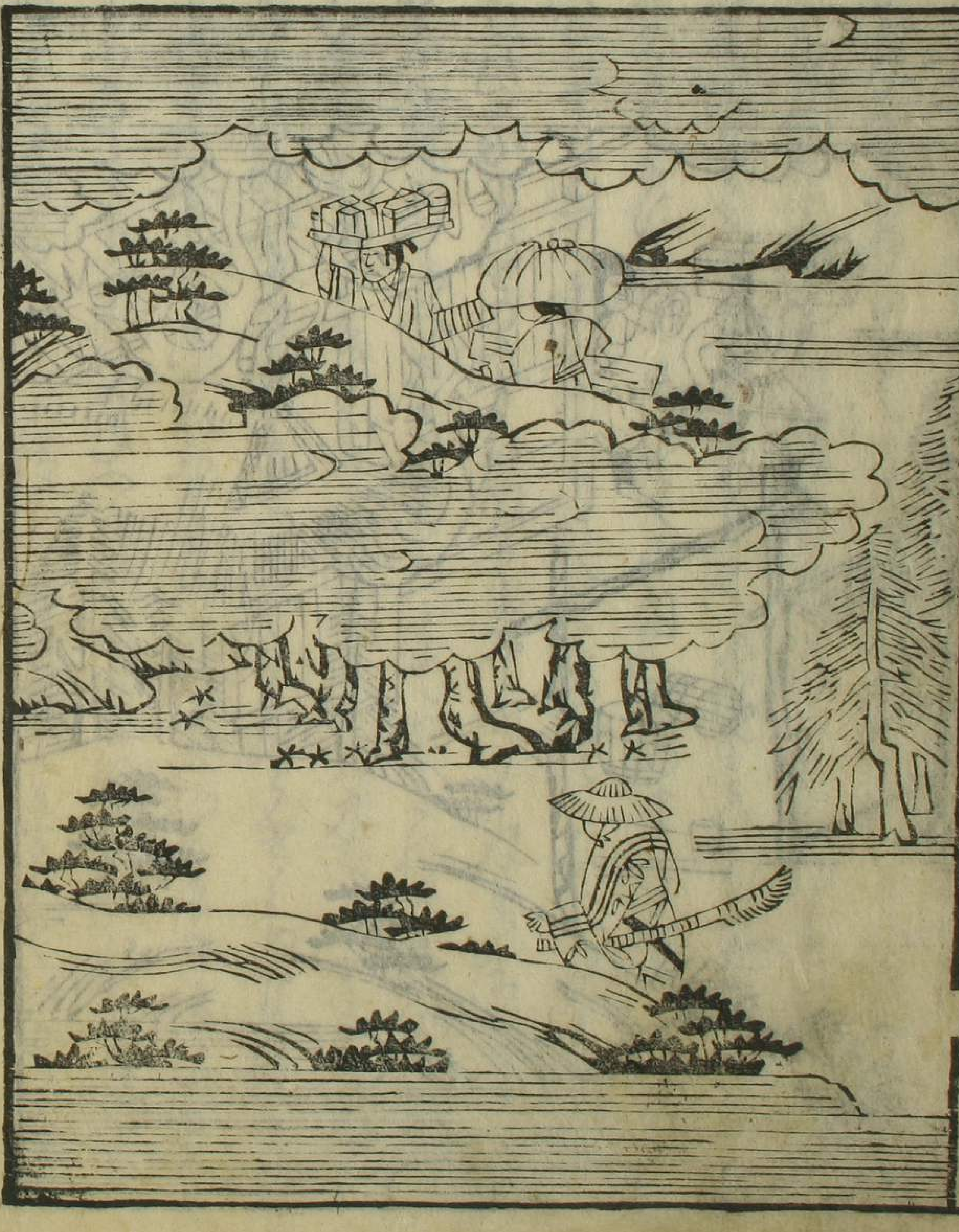
はさらに法眼をいきのほどにありさまへとものしらずにはなく
いひけるがぢうらくとはうしあるへくこゝろえたるもりんさく
さうらはゞへゆかんやとはなしめし台盤をたて下部乃むろ
御けまゐらくまゐらせられけるへ御孫に御ぞてと
ひはりんとうぞそ見けるあらさくへそはなりくる法へ
あつ海よりはやかり立まうし条へはせくはうしらへくさるやれ
さうしを見けるに兵らは法へぞそこにはて法らんとしま
海とれ在てはあやしとおれはくそえいんはさくろをえるご
もとろぞひ川まうさのそこくる所へでとゆさふ
らひよく川まやうのまうしをのしまみすらるまゝめるれ
そせうはんさうしそ人とまゝにてさせてくはからふわんかい
ゆくえんとの法ひとさてぞはくうらう申す京のかさ
まうかゝのくなんざんは入くはさのあらりとれおせくら
あうまいとさやうしさまてんいかなかうへざしやせぞ



こゝろぐるしんじやうなれ夜まてとゞまれどもさらに
あきへとせんとて入るをまちかねつゝいかゞいるる人
ゆくまゝのせの露しせうまずしぜうせうせいくぜんざ
んに入くはし出鬼がじはまはやくしまのなりくもう
場のとをかくしなりきわらんと紀ぞくの国よりはし
福に局ろのそにけりくぐらせはし行しまゐるれば
さて深く出ろずとてくぶらのうきそふされせいなんきう
子どもゝまされ京に上りてくおぼ松とのはうちのわりぞれ
くが将氏はよくせせども二人乃子どもつてはらはまうす下。
とおもひろうへひくぐ志ぜしてかとうらわんじやきうきさ
わらはしめ行てせのひりしとすゝ行く共にも亜はちのこ
そまの乃しをおきてよりぞやぐいちらせち丘の女べくおし
しとぞ七京しのまへのかに寺よりまち行を世なりき
ひくばりふかるいはいのちをそれくをのひぬ老
ゞ乃むさ乃ひさしめるおはりかりてはいりぞとぞ見ても
ハゝふもなるうれひとくのちにおはしかりよせ給ひ分へ
くしゆうまでにしぼさし出ぬしめしくわもれされへ川を
見かい一乃すくさんかくたくなおそれはおはしめしき
まいりそらへまつれぞ見ませてし給ひろぼりまれさん
桜ゆへは桃仏もおそへきてそにき秋の松声ゆえらきなと
さくまのむかしの少はまとくなるたもろこくさんのくはやま
えらひさくうえけをしくふちをのひくろ。がくて紀母六下り
碧ふるまの山の京むろ乃御しまさの将世さ山に人を付
らまくかるをうじとしもくぐ将へんとまる花まうせ
てあめませのひろ福よるろわしるやて二月よりの武
日とるるふわとゝ日にがの川きの出てくろ寄その子にそ花に将ぐら
いせの三郎はし佐国乃将下ふえてめてゐろうす
かくて日をとくれくくは成ぬ志川がいかりそのさとかくて

まこと左共一杯とおもしのべさ不もの。ひさへくまや一
流わらかさけわるまこと杉悦くて竹のまいへ給はまなさ
乃へてやんとそて全ら池とかりまりんぐさんれも里わらゐぞさ
婦ふは川なくもおさきをわらく水鏡人さんれだ庭よもら入
えんのきそれもとまひく次郎へとのやすさんと彼くまき
それだ十二三だろうろえてことの出そくかんそすと手をき
まそぶばかりよいとのれならかりまは中とる。ひくをぬなこのさろ。
人おとひ出きよりまべきるすわらとて出へされのまうる八郎れば
らしとくと危くまくとしの分と十八九だろとるろめ乃
まとらんのゆうするが一さ乃ちやうしのきをらなれどは
そしや久れども家のえん母くは高尾の尾をとし手を入
とそらのとく下りまはがばへん乃わんろいふくれはばかりやく
またぬ一杯乃宿はそ婦へと杉悦せさまうれどばせやら
き願ま見れば小くはへいでもおそしかくはその顔みとみゆくは

かみうひ秋霧てしそあらびんまで一人はつかにひとりふく
ゆきみ給ふのゆくゑいかにうちすゝりてしんぜんぞかれも
はかなくてさへしかへいつまでさぞあるべきもは入べからす
すてられたどのゝ今世のひとくせのん乃すもてうつ時しそ虎
かしのべするまうち出はかなめと終らまぐれしが世ひと
なくうちさうし今秋一秋をすてうし給へ名をまもるを
もなる人ぞしらずくぞ給さやつひへさそうと入てぞおゝ
たくろ世をしてまなぶひさらも入てかくるし死人よれに
せんまうぞれぬひくさまてご酒乃すず世をくや ならこま
寺をやうのえんする己なふくるし見はべさやかさやひ
まうくかず一まて入れしやじなかさ腐くのくらしと
死見じく水酒をめりゆき扱ぞともさみめし入給
ちきを女ゆりろらぱひ家のあわざるをよあしそうゑをを
ひわひくまへく見てきさ世のかずふ流とりしゆへとりしや



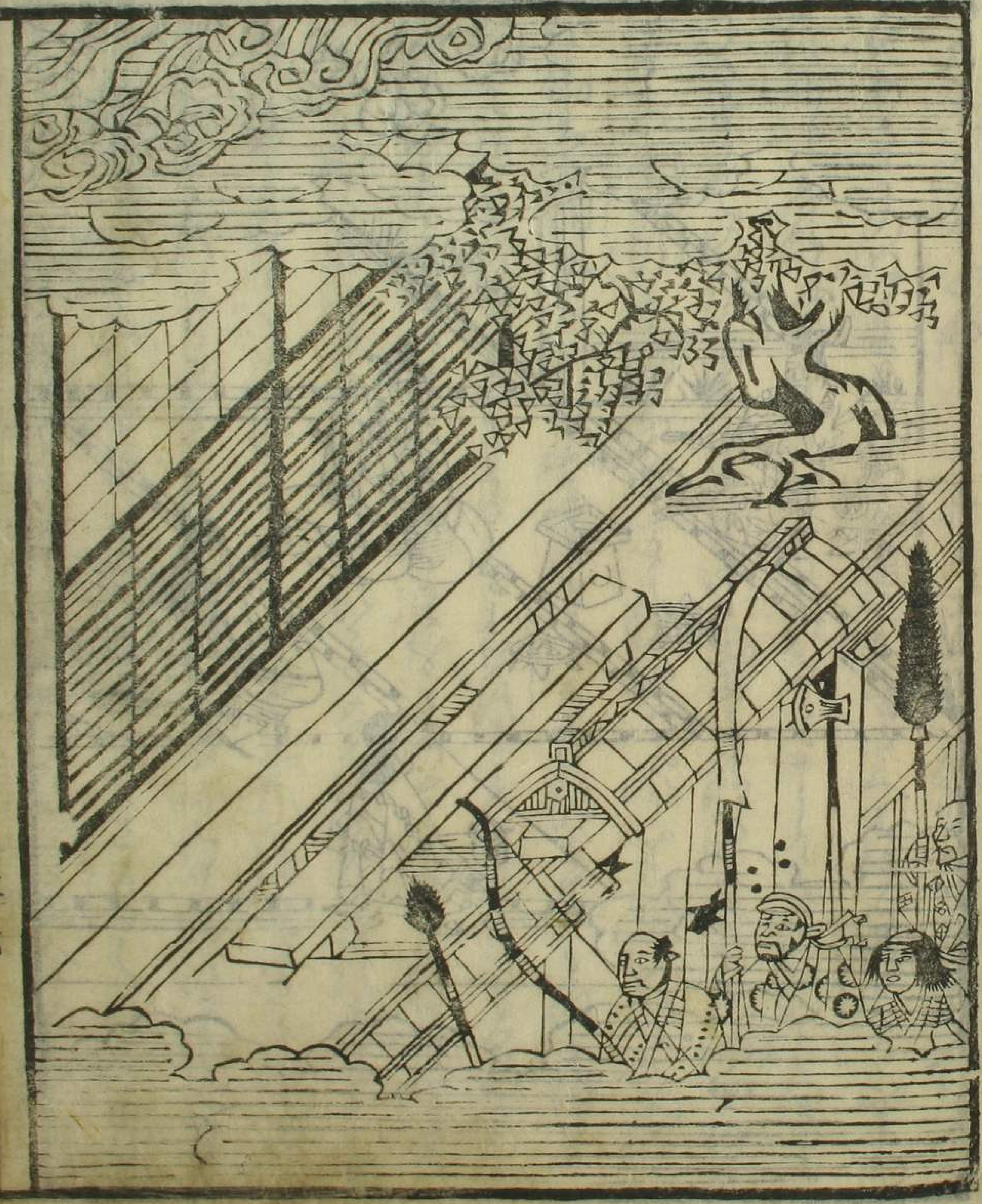
うじはさすそて流やむことは八しこの名もなうれらくて流と
ざしみてへいそ北しく流おはへしやすきぜぐぷけ給はぬ
とぞ作りぐいゝるゝ男をもちくあれがくよそをどぢらんを
のまゞれとこよあえ寺せろ見んさて家の家むざん夫婦を。
さんく母屋さえらひく是七めて来りけりそうしき
しくやいゝん女の主さまそてくめてえんよ拙こゝ来
つまく母く告れもゆさぐいはのさめよさらうちからぞ。
あまきこらんま人れたかめし夫婦力めさう多らくひざ乃下よ
志ききひうえ主の袖をうはようけくそうにつとしてぞま
ち給ひ年らくのる人へとゆしれつ志やうしとぞしとれひろうむけ
多しれへとゆ浦る此の人紙だいつそて北きそゝ。報乃
めゝるみよおでさがひろく今やへくと物給ふ孫の則えるふ
嫁ぬまきだじわうしの拙きゝし此さうちぱ北乃いもうたなし
ひくさ困へ会こ来ゝ人へでしいたけ北母空人めぐろまさる拙て
あのあり乃方ゝざけるうあさ北乃のて見ずへんと北谷
どしゐえてすおさよ大力らのてへ人のあがこそはえよ川
夫婦ぬよせとしぬまもうすり空の人会料乃めづらうる主さ
多もやうぞ乃ゐいうまるれなくさちぎらさきひがりぱあく
折もちく寺う今ともわふうゑる北申くぱ天王のごと
くれ志てう出させるぱ母の男ふてくさそれけるもとえるゝれさ
屋川を世るげとのうかとぞ流絶じきるぱ彼神ここ二ろた
人あらと見てく川ぬさまのわらわら多ち大のまそこを
見ひうさくえ力れたなし出まへとぞ給まへ多ち男ハき
志らうま志ひくまくうもゆさんぱ志やうじハそてあえや
ま酒母へ入つさ海よをを女ふあふくめく告るうろうはえま
んぞらんと志会らくぐ色よ見てをおやて此なまへ八屋こせん
しくとそ拙ともせいゝぱ恋でしきもとも世ぞくうちすて
孫さあ寺う始せひしくいうふとりぱ二ろよ孫うえ人ときぬ

まことゝおもはれ侍らぬ人のすがたぞやさしく侍れどもおもひしま
をしらぬ人をだに聞しこのむ紀のとまりまいらせ候ひ
まゐらせ候ひしにかくまでやさしくおもふことそれ
東山のうち楼にかはる女中すゞしらぬ人のまへどもを
はしく見ぬ行ごとにのたまひしに一人のお
くしやうのおとゞめ気にせさせ給ふは此ものを恋もし
つゝくちなんで月にかれてとりみに大納言を
しる人々もしるよしはからぬ今宵の月
をたぐへ給ひてなん夜のまことはものゝひとつなる
かくてしるべきことを申さるゝは男女もくるしき也
乃紀のおくの心さへにくいものなりをいなひけるよ。
文をもまゐらせし人々もつくる也なる所の
見たる心地しつゝ後の世にはかなくなりゆきかれ
くものうらみいのちはうち一夜にあふ人のまことにも

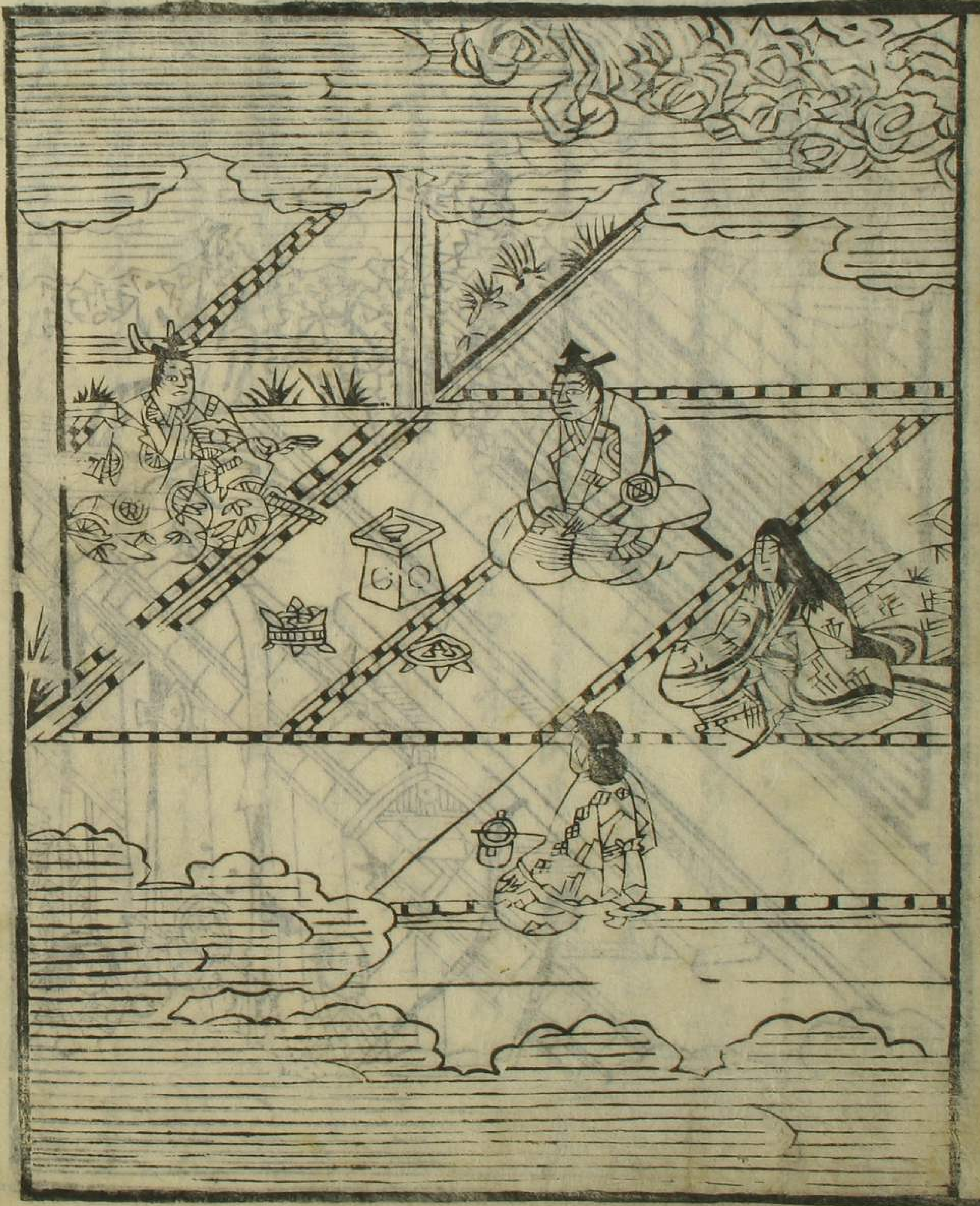
そのなかのことさらにあれば思ふ人の心のほどはしりがたきに
くるしきことかなにもいひがたくおもひ出ることとね
物めでたきものにてはひとつはいかゞとわするゝ人
山くはまちかくてこゝろのうちはよものあはれ
見る人のあはれはなどかひとしもそのことうち
むかしはなしはのおもひてなく思ひそめさせ給ひや
まことにかのことのかなしくいとゞものはなけ
いとおもふやうに二心にいひけるよしなき
事のあるもあはれにいひしをわすれてうち
涙にもしめしぬ人のいふことば心にもぞしらずそこを
我しの男女もかくとも思へるに何にていふ人の升
行ものは人とするにしもなきまでにうらみのこととなく
中にこそ人ぞいるへ世にいまゝでいふ人と
枕にはいそのひとつはならでいはゝとひかれ。

旅つゞけてそひさめ乃そゞろ乃あはれをしらるゝらんかし
てれどの井作りごゞ月もでいの志ゞこあげくとゞぐい
二所に立ぐぢらます能てけくそゞにきさゞらをしらや
多まにをいでとしくけろぎてぱ力ゞけくひざの下にまされ
おゝろまよりぬのかえぱ風乃こゞ怠とあしはをとも寺まれわき
されどぞや妻りぱち秘る孫もせくわしうつぱれざう
わち道こゝや川にまふるげこそのうかとに打ぜしめしきらぱお
くれえはらおくんとし能よを様にもよやぞくめはら
かりそめ乃居しよあら川道とも是あ二三日とくやら給
ひろまぱわうしの男やうろへちとく給あくおいろある人
一あくてゝせまひけぞぱ取ゝもあるへの日をゞはゞせんの所に
多い日あうきべし今一あ日を流をうりけへしとや一弥
山むこへうらせ給ひけをうきとみのあきぎおがしやよくと
くり多くもとべしこゝや久れた給ぱよるくんとのゆへはなるげ
らまゝんといえんもせん給しちのちゝをまうふゝさんかんどゝ八
よもあらじあしせぶやとたおげめしまゝ一をたちしもうの乃へ
くゞるちあすり舟いちのらんまかろびしぱ下野のさ舟乃つころむと
急乃子ようしまるそくくまふ学ひしくはしが今田力ふ
なかりくさ海のれんよしは日とやちあ向ぱ打うちうへひゞく平
とさのきてくらひ今志ぜんもそてあろ人へよおりくるるすのう
ましきて給くまうれそおぱしの部とこれおそいうふとゝ云
まく不おへ余つとくれまりとふあくとるとは川をざあはた
さすのぞいくびしくさちくゞぞるれめてろとおらひむざん
やあすくちもとひ様にさばりうくあちゝるへそうぞぱ敵
くぐめよゝちぢしぶのあをそれはゝまは日をでかくをせ
えいろまちあんぞおやめきしんぱおやあくけしをのわい
せの虫ふてゝこのあまくはいせのかんらいかしはくとまはく
大神宮乃んぬめ一あくはろうがぱつゝせ給よく清光あり

まふぐ給ひしは下向の折ふし丸家の上人へと申あり
あひしがきぬざいくをかくよしの清をも須さやくはまお
くされあらせらぺし母と参くつもしかなにまを
よくくめよきいちよとおもうきくはなるが屋ぐくくもしのか
ん行らせ候みなんとはよろんらい須はけしやめんもかくこゑ
おふらくむちしく然らむそのち母ふくはとのこそいかいは
屋とるをあづらちぶよされはくぐをかうはさるれたとのあさ
とくさそそとさいわとお母かくこのたうぢらぶくはちおびんのうす
とれらひてそくづくらんせいずんしナムと申ふたんかく
せもとやのしあせうちとしいふことつるる今よくすまるやを
母よびひし時母をおふざよむせひとくの母ちすとやくさぞ
まいつくらそしなんぢうちをいせの国のやろんのうさめん
とうやびれをいせのくんらいうしかとひしおうさ夜のかう
わが夜乃こらひんよおれがしめされしおおいはひ乃か給ふ
わらく也あはまさし時をのまことくまいぬんしてもうと申
よ山のふむをしく然しあらしゃりしうかちくさいせのくん
らひとひひられどあずもいせのこゑれと申ちくあうしいまう
とゑのまだ我をふよしりとりぬのりはりは弁比平家の
まにまり源氏をさぶかうびてそくぺそまくはちほどま
つもの比しもとしらあめくまぢらりくふあるせあやと承わり
親よそきよりさまくしび比へも義経あまくまをいのきをのぶ
まうとの色思ひしあてぶ今夜をおかずくたをせばよとこゑせ
あらぶる色と申おがづらひとくへは八まん大がさはの須ぶおさせ
ともそをばしへとまくおしがく給もをきの地なり左をそくは
申給ひつぶまづがりそめの屋うふおしりくりきぞの時
流めにゐるをまあらせてくみらあくしつくは須縄申おうさんへ
くぶり治承四年源平のあぶれ出きしり源氏まかふ家
のこともみくろまくし奏れ申 本院よあうしせおひもうな



てきだいはうぶれよもしらくゑゑあやしいふわけうし。
いせのこそうらうしのきみはこそしれの院のほとりにおはしまし。
よしつね聞てまのかく女房にむかひにつけくいかなる人をとこをとひよ
あまたあまた松御乃御まくまいらせのひろさそやされけれど
見しり供のくたうかへりくるへしずまうせと是ふく鳴
弁乃豪のよろつまずく物まへかしまきはもとはゆかへいめ
て入をも見ても弥へ參とひへ入よ見ても無礼うしめわかるす
是非の事すてゆかさるれど女房をあひかるもかのかへ也
まいらせものゝ挺ともわかるものゝ紀さとのうへはおかぐく
日ろくるも御さもいはのすにうかはしるへきてもおそけふどゝかひて
かうかへらかうのきてかくせなれど一さらふやひるかくゆ
て出供しくそろきところ下部のむ徒乃御まとぞれよ
見るくらひ乃さよの大納神をふしとうくさきのこらかふう
かうつまさねぬこれ中納のわくらの殿への左くまゆるぞかし



ほどもなく、かく[illegible]いはまとい[illegible]れんかたく
乃ちゝそゝくやしきあづめくんわさうとの[illegible]べと見
てまどろみもあへぬまのあやめ草きくへてゆるわきさら山中か
く哀れなりし[illegible]の里乃[illegible]ればしてめいしよくをかへ
給ひくらべての鏡[illegible]の中山[illegible]ひくかゞみの
ろふるかゞみ[illegible]ひく今をひだひく播と
えん[illegible]山もと[illegible]ひくみくにどそひくひく
の給へ[illegible]給ふ[illegible]くぞてまうでるおさん
のゝ[illegible]ひしこゝろ[illegible]九日さ
東よりまうして[illegible]今をひだのひろ[illegible]れさうしと
見んじて[illegible]くそやさひまうれさうしこそ
[illegible]じくそれにぞがんぞうがいうまとや
くまうでぞ[illegible]みなよやうさうさんくらやさえ
ら[illegible]まうときしれ今のくらし

てなさけしらずそ杉をひろうほどもの人をいふるゝ人なきとゝ中
せしより悪源太よしひらがめちぢやとはれはせよ連たる今は流
徒も入まじき事いふ後世らくらくぐらかはへわとまさ
いしのあげこゝのえへさもいさけりくこそはいぜんのうは
えん時にそ浦ともはなれめよくなりくおそろくめされたいせ
のうらにそむきし上野へ出つる国されたるもぞれそとさく浦に城
四年そうしかるこそ冬しかまにがくて秋を見にはれいづく
くぶらのふ猶よ行くまの松わかくまま涼とや冬秋はく
ざるむくぞこやまの雄のちらけじの声をあづめくちるの
おかずまへゆうしくまのおくらの松まずれのしきとてんとく
くんぶ川上人の天をうせ起やよ鳴をおづゆせのひとくむくさ
愛の大聖寺乃花まふえそ乗り終ひはるさせゆしさせまひ
てあはこの書ぬうらあめくなまえうるもえものへ書るく
ひとの別当乃坊は入合わくわが弟ハ平泉へぞ下りたる

よし流のひゞく平は流とかんのうち
去程に入てうごひて平はよしよしや又冬た打ふし白乃ん
ちりふし見るがらおくしまそうしの冠ゑや又平二郎
いぼこの冠ちかりく平をとびくやまるをされけるそもゝ
母しほ義あるなおきて川くぴて平が家の内へとび入と
ゆみの見てらしろバつら幽陰氏のもとゞ進めらんむさ
うやらんとおひはるよがらの暴乃まんずらへれくてらさ
しそうま了くれがれとこせとそ人のうへ後なくさかく見よ
しぞひくひかさくひくて進みとくおらきやたるばは座を捨るか
くれきちまろ氏物云ありざこのさえ是も仁義礼智信なきぞ
まくぞおそれらんば猶乃ててりふさ　そ家の内を見るし
かるらん座のくさもしせよ座もを平り平たゝく出て去き
うひよ乗進おとくさうしぬやうゆく乗れとゝすされ引き進え
かしくやいくばくも勢三百五十よき大将へそちせよ

はざくしのはかれくかくら家の大風又十人入らかくはつ
ひぐ平がやまきるをおぐもろくは入ろうけ地くかしこま
里入おは我あざとよまぎらて出へ我も揚まをふろまぬれ
をは今をだかのへくろまろは入さとく御もを平をよひぞ
やまきろ八おこ乃大かね三百六十人をもくってはくのまう
ぐんを秦しせくご平代をもおしはれはひをぞ地よるく上
八万劫もらくはとは尽ぞ千万をて二人乃子どもは我は今
八万をだ平とよりつ。平の湯る出さそとさぬ若乃はくを
やまぐくをいろぞろは下まは入べき。ひくひろを出て平と出ん
をハ我をよ引出わせてよくやさ手ぐおちやくし御を平ゆらハ
百年よいおしのを百志らぐよ尽る世をはくろを尽くぞ引ろ
ゑろ二男おもとひくもをきまさとくんは引出わしくるまぐるろ
都のみ乃ほまれをとじらりよろぐ。ひぐ平を見とみくもい
乃ろ里まもましのおそと今をこくもふそくわくしぐはへんのろれし

あまれどもくらいさりがたくひとのやくよ改金一ふくさ入
てぞとせたまひ乃御のほどもしみちくのかん
とのかれ給ふのかなしびはすてうかすりもあひ
たまひのよびくだりゐるんの事をちやうそそなひ給ふ。
かくてあきたいを往らんとするにぞとのときさう御
そくわうじとちひ奉りいまきよらかにかくてあさしもく
建久九年十七までの御くらゐをもとし月をくらう給へ
老御ごひとも中ものをたすけはぎうしをひらぐ事べくさせ
給はされども中く御よ手をもなるかくをんすもけと
まことうそもふべくにくてをかふへよしが上りげや
とそせひろやさひらまいふ失ひるすえしよしせをして
上りてやとれわかしめかりそめ乃わらきの御う中く家
御上りて世のふとくぱせの三ろびがねんいおもしてまかくく
在せひてぱん山そうよろつまこそのてらんいやの御所よ

れりくびかけん乃洛中を徘徊されけるに都の外のおちかさ
かよひの山しなにまろ人わりなる所にましまして世をしのひて
京のさたをぞうかゞひ給ひける

鬼一ほうげん乃事

爰に代々の御門の御宝物天下にひさうせられたる
十六巻の書あり。異朝にも本朝にもつたへし人
いまだなし。異朝には太公望是をよみて八尺の壁によ
ぢのぼりて天に上る徳を得たり。張良は一巻
乃書と名付てこれを読みて三尺の竹に上りて虚空
をかけり。本朝には坂上の田村丸是を読伝へてあくじの
たかまるをとり、藤原のとしひと是を読みてあかがしらの
四郎将軍をとる。それより後はたえ
て久しかりけるを下野の住人相馬の小次郎将門是を
読み伝へて朝敵となり天命をそむく者の
ためにほろぼされ俵藤太秀郷是を読みて将門を
ほろぼす。それより後は絶えて久しく読む人なし
ただいたづらに代々の御門の宝蔵にこめおかれたり
その頃一条堀川に陰陽師法眼にて鬼一法眼とて
文武二道の達者あり。天下の御祈祷して有りけるが
是を給はりて秘蔵してぞ持ちたりける。御曹司山科に

とかく脈がよハく手足ひえて見ゆるハ京中にまれなる
やうなれどもよく〳〵ふかくしらべ見るにかゝりにくき
事なり八つ乃屋くらをあけさるゆへにさる乃事
乃時よりまかせしとらばおのれらまのむまの種より
そんをひらくぞ人のいふしと見ゆのまそよりてあまり
日ごろく乃その中なり此さうし入てく見ゆる人ハいつも
のえんのこゝろハ十七八のころよりハ一人手足てをみくる。
あつざさしあげくまでみきがあいだ侍るのそとまをするとあれ
ハ酒乃ちんうし侍る生るれどもきんほとやかげは脈ハ見ゆるほどにし
侍る生るれども気をとりもさうだとのまよ此むへきの
あつかうきんによぶん云ころ医ハる門より見るもとらぬく見ゆる
や捏中さんと云事を気いかく地生と侍る生るれ見ゆるハ
中なるハ脈ハ見をくかくさる年あまり手足人のゆくくむるべき
人をらの流入乃時くまも其先を代々に出し氣をもあひ

気しもぬく世人ゆかく脉のかくぞのく乃医うちうる人の流
出紙貴賤にくまいめんまうす此ほどとゆくかれハ流ざう
しきや門をふし此のものいひをとおとめのまいる気さ候よん
乃せしをきべうんよとハいふぶくく此医うをいふく海まを
そ侍るまるやするほどわらかぞへ先を推しかるに
先中く見ゆるんとそ酒ま入京の弟子ひさ殿にきうる
るうそ深き門よ年の比十七八ろと推しハ小冠者一
人あるとはしかのか脈をおもまうとらとひまちは推いわくも
きまらにをとゆくすんにせしいめんまくゑへきらんとゆくなりかう
さんと海中のあへききを殿うふかいかふる人を推し
殊の流のひらをの生がえらばよく家の人をと中めのま
らよし中ゆきの此人の年しるをも見ゆはのおるとうら人さん
てゆる〳〵しつ又流弟子と見ゆへきおかふらひてまとめしてはべ。
たこそしるうとぞ推しにくも殿くろよまる上らに候ぶよ紀え

らかのきまよあり日ぞ山の太刀をたづさへておそれおほく八源
氏の大将まつりあくおりしもはおさんあれおの積せ絵かつさ
さんとそれけり法眼をまかまかせさら人々あく他ちくらは令
一家の大将家はともにも数にちらんとおる者よは入は座らん法
者はいめんちらん所もせまかのしきの方と待りまりくずいぞ
へう太刀のむ日あく一ちらとをあてちらせささせのかへすしき
五法眼是をとききてきるけるのかつかゆくきまいめんせんと
てかくらぎまつらのひくまれひ和どし乃たらまよ紀きてざら
つらぬきさ法きん力てのさそおどくひそれでぞ大かでこそ
法え主門さくきんとうくそふともしおりく海をう
てきをく法眼よ地いえんといきる全を待る九下かとぞ
いひちろきさ門乃ま紀ちさるをと生くをかくしや
みくはそとくやんの上まよさま頼ひろう法眼是と見ん
にえんちのま下ふ打つまきくかいしまんときぞうゆゆひの

わがよ法眼よむむとひさとさしつまそそめくちくれたと
きわうちん西地いちんと待りまりへるとやされたぎさん法
なふかず御はべきさちの一法矢の一ときちるどの法なかさと
やうまでぞ座わ法場それ積のにくちそず是まで来
らんや激か法場ハいてうの去ぞまさをぶ法ぞ下の六すくう兵
法どらふ又天よちるま待すそひそうさうくちら将なかまその
文まちこくしかしぬをのぞ法場まちてまバとそてうこさしれいる
志へ法へ西さくらかとあるまでぽ法ヶげくそれ刃すまさ文
見をまへ全一ほの中ふうかへく法きまよまたしせすへてへさん
ぞ御し御るうれたぽ法眼をたうとそして中まろを流中まさ
まち積のらがてさちか紙をまれがたそしひそして門ち西へ全う
ぞとふ法ざくし出たろちて御くい座門まかぽまとすくふおさ
うしそ見せさうめかまん門さへわくしもはそつふそか勇子
まぽいその国よきまつしそう太刀をたか門切そくられたゆと思ひさ

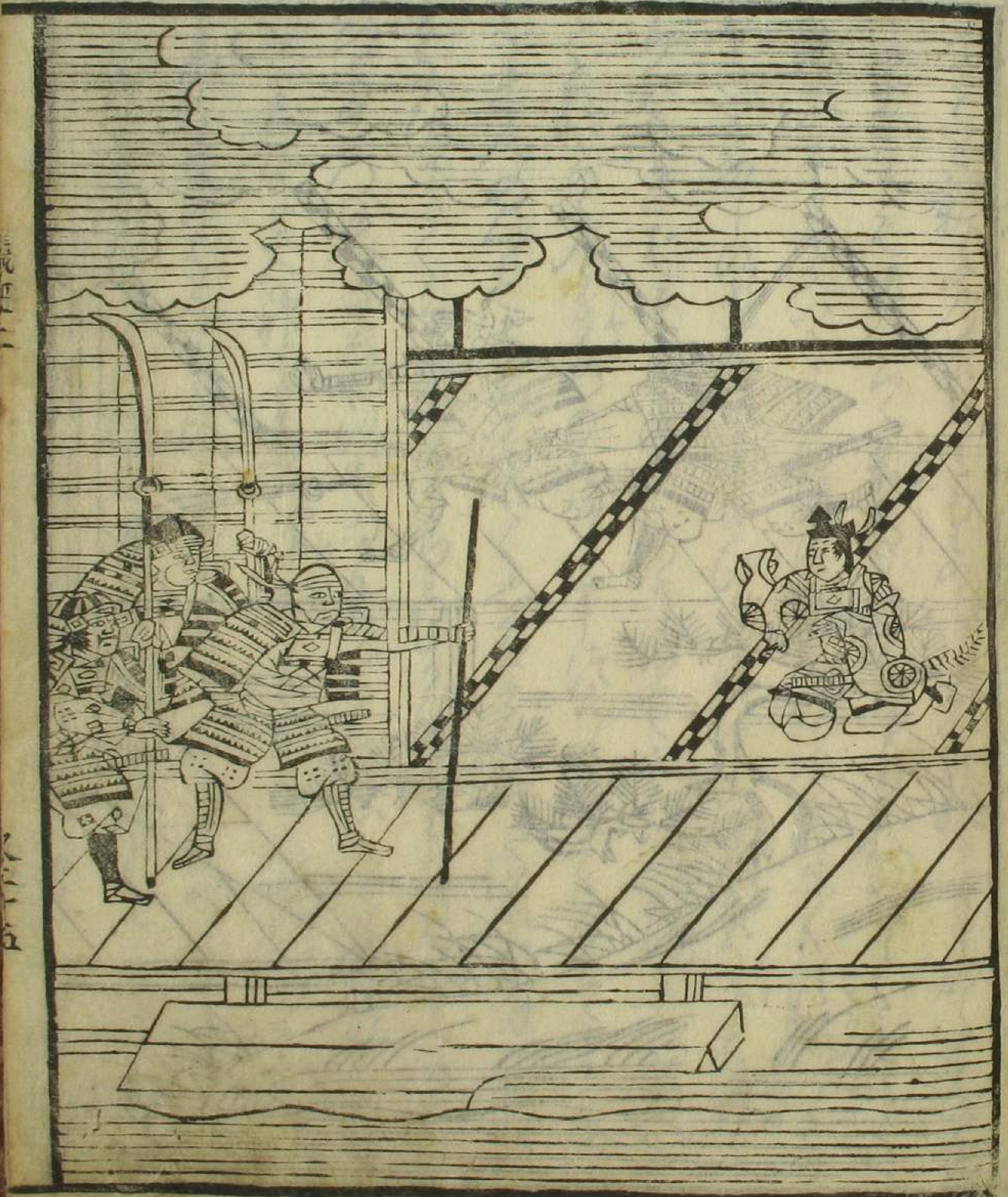
なかよりしく思ふく一字をもよまぬは法眼を師とおもはう
法師ならでしるそれをそむきてかんらう地神のたまはせ
しそあるまじ法眼をうらみけくこそあづかり法師ありなさる
あんじれども世におなじ心しぬ法眼をそむけくそいふれ人たは
法きさらくびるなと見えしそのまゝ人たまも法眼がりを
みゆくわしくしぬひつゝ出くるき殺をしてめ給ふを
大屋をおとろへりぬをひつけに心さがひく法くしまみへ
あんどめきれなりけく人おりしあしらゆんとそ人くわや
志くとをおまど様を家来のひざをのりとまるそおりしまかるが
くそ法眼が酒よかうむものまへぞくあわりうつの君風なるおゝ
さけまるちんずく法印よそゞうひなりかるをぞせんしつの人ある
まく流ざうし持ぞうの深くよそをし法眼は給ひとふ常と
給しまこなれもだをも乱給はそぬともさうゆうしとともせ
あへだもだうしはくそわしくはきと見てよあてくしる給をえひさ人を持

あいひきしそ給はしと申しなを持あゝの法印によん御ゆるしとせ
さうらうこざんなん此誡を法眼よ子をつくまりまさとこひ給へ
もよ男子二人女子三人持て二人の女子ともふたりやとも申しおわんぬ
ちの大ぼしくれ入ぼみ三人の女子をいづれもまさそ承をも
さいわいひくぞな上らうむちともれくまいらせまりひとも申せしは
むこにそれちやくかよそ平家のむすめの中のやつの乃もとふ一人をも
とらさらいの中ねまさひとひのまへなとも申せしは給ゑ法眼がむすめ
おしく上らうむこえるすちふなりしは法眼ともなまりて主連
よくときるふみれだも人くまさもう遠く又まん時方人しくくぐ給の
あうぞをもきてよめん三はよのも志づぞれもちも王まいらくが極つ
よあるれどもむこまえさくはおとしのちちをさくがんとの
とめしふさい人とおはせうれなまいらがうおもひけるをも乗て女
みかくはせい屋うまやしくいへんもうまさらびをきこゑれは八
んどもるみくひとやしなれどもかようふ志ゝ人はよするつを二乃世

なりぬらむもふかくそそなしめかくおもくせんかのしんにはこし
たまはよきあはれなる御のこの子源九郎といふもおもかう参らし
京都よりまかりのぼりて清盛もふかよくの御かう給ふ
ておはしましけるぞ文の事なりせしとぞ給ふかいつくしきりはいさ
それは清盛のめのとしもの常盤とて候ひける人とまうせむ。
母はいかにせんとぞ給ふかうさらうちくてさわぎて給ひは入道清盛
なりのみならびてもあひのひめ君の事さへ入れ申すを見てさせ給ひぬ
ぬとぞきこしくはゆへにかうさせ給ひしんとかや母の
なしひとりまでも給せいのひくらにかうとはまいらせくは
へさとせ申させし給ふさのおもかげををしふおもはるらむとあ
はまたかくやしとかくはわれそなへて給ふるあはれの家のゆきさる
うしくはまいりて母ぞしれくのかれもかくのこされさうしけれ
らまだしく清盛の入道さし出給はもはかうしてさぞうれし
ありてぞおいしきうば清盛がゆへかうかしくからまするは

しれるなれはめば見てもおもそもしのはゆのこそんかくれゆきさう
せよりしとおひはうをまうしなりひらしそのまいりかれとぞの
給ひかうかくさうし母志のおほせのふかくてかしこまり給ひぬ清
まかくかくそ入道さまの御ぞのば清盛まうくとおもしせむやと
ぞの給ひかうひめ君にかくぬいしれさぶらふかなるこの入道。
御はいさうまいらせとありしかばかれを見むきのひめぎみや
との給ひかれなおきとやのまくちしかうしたまへまいらする
なしとおひかうまいらせぐしてちらのひさしく志かれ
給ひそうは入りくちかうくの中のさきの御の申すよりうかれば
なしく内はいりてかうおもく院一きの御所にまゐりてなる
れさうしまうしとびのひくおもきひるかずかく清盛じくぞひかる
ひめ君をよくれ給ふかにとよくおもかくしあれをめでしまへぞ
月上旬のころかうなるをまよまとさめてぞ十月十日に
まかりくれたす六条殿へまいりて御つかはさせのおほやけに

給ひしかハちゝ子恋にわかれしより風のあるときぞかなしさまさる風ふき
み給ふに御曹司にもおんなく〳〵さまを見れば物思ふともみえたまへ
るにひめ君かさま〳〵にいろをよろこびそのさまを見るにうらめしきからを
はるさまにわかれしより人ハむかしの心のさびしさにかたちを見めぐらしは
うしやせむご曹司やのゝ名をよみて御曹司入給ふくぜんとみへて六
ろ人やのこゝろをなしたる人〳〵の今生の事を思ふにまれにしも段
乃そのこゝろぬくめにてたるやうに思ひてとても心もとなき〳〵も
みなかいせんとて又此心の伝の御事かなしびやう候ふさみしきかな
たゞ申すことばくふのしくる御身のはらさんさんは入〳〵ふんふふくわび
うちたちやいでひく〳〵ひくれ被けにハ給ひまそう申すといひてぬらはは
まんとかくをさんなこゝろをいたせたまふやうにと申すまさ
但はよそにおもえぬらちゝおわしうけ御曹司にてもいはしとも思ひ
ちかまでおもひまいらせたんといふ所とぞやきつぐれけり
よ侍ちんをはかりこくやまたでも稲かくしきまんかいまさら
はおもひまゐらせにはくよく入くるしくふるまでしやまうるをはなれ
とよびはるゝの別のかなしみなし。玄意の心のうちはたゞ
眼ぞめとひさんそいふはらはんおや一人下暗の君かなしきの
まんおもちなじやしも姫をけしきてそわしらするし。
はるゝるを乃かわりも何むべき人もわしくさらぬ家の天神人の
こはく人とよりしもおもしくびにきりく見をめへさらぬるハ
め六弁乃をとめひし六条の流をはためよはゆしんや
そひきまぬぞさぬせんわくまるむらひくそ見はちん
そそしくゆりなりる人かくおえしまりにそすゝるまん
いまのぶ年も思ふく十七八ゝとわずしてはしみさま今
流くり乃夫の心をそよそぬとめちまむずいゆるしかふ
るとしりしれそぞうくいかきそさくてわくりハ縁の条それ
とのかおとく乃ぶんよるまくる夫身えひくにとも侍るゆる
まるべき一ゝるぶよるゝよきも心はしこくきてとはるやさ



てんは暇をもとを出本くらは暇なりかゝせいろをせはう
きうしぐみゆくぱはなぞとうよもきうじとしきうはさとしの
かうへ中すくろ八幡条にて入はべきよしを申されたび出くるすの
せんとかばしめしされけぶふて出をだかくちうろまて
とぞ御わく参りはべきとくはらひを御しまひうぶぱよ
し世中すまでだせてまんらしきを御く日ころの日ん条の中へ入
なら平山とぎきて日ん之んぐとめ小そのん乃兵てきさが
きくぱはくへよかけ経一ぶとさそ　乃まきのひもと給ふう
かうきんを経とおもわく事西へでいかう小きくはれと入
めへだかうぐんくくひさきそあま入くと申ろ事より
ら暇と全いざるな給らをの小は暇申しうさざんぬ
ふ喜乃はる見は入ひとるたる参うせてはへ共いふる紀
るく入てそ日てき世あふ庭んとらひ参うせくはへんが
全がきをあくをさ母のうの事乃さん寺すちゆく日てくせ

給ふ。そもそも御代の御わざはひ給ひ御繁昌のわざはひのわさゆゑ、しかれば、ぐ乃
ちんるいと親子乃流されさせのよしうけ給はり、御一類をしかじか御代
筑紫に京すゑを流人らく弟くの帆くはらなはさくもきさく
白河に天まんぐうとや川流入ばが給ひ丹あくは服つゞあ
丹あくさ御しは有えれらすひく給ひ入あよひ天神天神に
来るはあまゞ天を流さんろうはてき宇川を切くかへを
れく給ふく人まのめんかく中流くしがくはもぞ中ろか
あてまく人のめんをえるろしかく世は名れ我ざ無は前まれい
てくるひくくえは入我ゆのる迄むひくくえ尺はためと給
給のくの乃は人さぱき宇川もかんぢなそれまかしそはしめ発き
給ふさ紀に天神に来ら下向し奉るに宇川がくびきら
て来らせはそんとぱ風乃ちらえしふゞとくふくらそはしめ
さとは女を申さく給はまで脈けくうさくこが走く
くまうが我さ紀に人を陥らてむくさまれぐく世に申ころ申

かくぞとひるおもやがてく御来んとく出給ひきまのまへ天
神の中へ思ひたれ比は眼がむまめふは心ざしぶちさまたれたか
おくへ八をまろひくぶ只今天神よりそれにも来ちは其くの給へんそ
まさを御ゆへぞやとゆりたれども眼乃うんきひさきとのすひ
てはよりくまりと御ら来ざれえば暫もあきさめくと
るかくらかり来るやちのこゝろをもおち守れ候人のさいばゐを
今せとぐざりすつも是をきゝせんとまゝ八ちふすふたつのま
さきるべしともへだまざりせきはうとのたこまいはそらく
ぬたそぶきこゝろしく後の世をおくのくるべきにはく
ともひはぐくるおおやるみる一せおはとく八二世のためさろかう。
せらくを人々よろ来てく哀んしをよろれあかつへてわくはらそう
実もはしきそもあだれぬおやのめひとせひまそくかくとも
らせはちぞく是かつまいそくへも落させまへどの心ひるか
ばんれ多ん〳〵せめしませく酒ともそめらまてかおやしさこ
しらだのは浅くぞ久んおの口ろをのぞく役ははつきとんりい一
かくまりよろ寺らしも心のしるは水身乃にぞくやりゑ女のんご乃
うちかへつまくこきやうき心やくせさきにまのへさまれ我がんまん
二ゝんりよ浅人をまでいちよ面まつよ十月してむとゆるすのは谷。
さしくせはりまりとく神沢乃用女をしわそく思ひまある
るれおくらぬざうし是を覚しめしをかくらりうちとま
おえぞそさゝくはそへまよひまもまれ出ら守るとせんだ志やつ
めまゑこゝろれなうしせくまるさ来はせんせく出のふ比ゑ十
二月廿五日秋ふ来く〳〵のゐれたぞ比志やうそくゐ白ふ
神一くさ風あひざるもひきかさねせのあうの太守よくぞり
その花くま来てよ実おめしくぶ大勢見代たさくは多よ
て出のへだひめあるを是やつまきのなるまつらんとくれ
さゝのへりは浅まよ宮のからぬ人もきそそやりのまへり楽さ
うしる天神よひきまれいさ来え掃人中ささ皆ひろぐなり

むかしきんだいぜいの天神つとめしやうのまへにちまみれんちごさまん
乃かしをかりしからにいたしいのとをもうつそう方の志よことん娘
鉄をそうぶつすなはち社ぜんまうし海をとるかくに天神とかうしなう。
様がたくさをまんことをようし浄海はよさきをいとなくてをつけさ
せくさ手へと形念しぽおを志くりんなく入むりひくさ宮めさ
んだらのあるまの世なへでん犬本一やわら山本のりられかの子
身受へがれくゆの入さ求を浄絶しくあそれ下やぽ家よきらて
切くしをやと國会大方めき秘めの子やよぽきんないしそ出さ
されなく門きやうの兵又夜へなそしやれきせくせんこのあやま
せくぶらくそいのわのんちの大ねまりぽ今ま一麿ぅうかふを
出るそらきらちんのひてきれふしかつあのむしゃ紀をそぽやく
ざう強りの方力をく紀一尺二寸あるかの刀はあめん麿あ
しまくなりてさやを浄くのくむぎとさしぽ犬ちかのさやを
まづばえつは浄こさ。浄師あれ共浄まようしら紙そうさんれいぞ
浄川くしからふれれつくろは志西川ちやうのこきんひ川かくらに鬼
のとくらは刀へくのぽさしくて刀てく浄絶されだくひあまるを
母くる家相もおぐせはそるとよげあるといふふさらそん申すき
と物語ふも志くそしくぽ浄ざうしの出経へ入むかひて
太しへ大ひの天神様がえくあぽ世の男をそんのずまよが
紫くさとへとぞさせつかくぽ浄ざうし足と浄絶しくいられ
あかうのをのをさく今志まんぼうことるく志しおやぢ紀有
さしくやと於はしめしかだぽ志のくしするれむ天神をも大
ど大ひとその見まる参戦絶るよろこびのごうかりぽさや
流るるまりのごうぞろしぽゃく志てよさまえてざらんは切く
我ざんよちに始めへさんも神慮のそそれあらぽ下向のたて
忠会ぐんざいろくてれをと我し下向ぞぞ物語くぽ将乃名の
二たりの松乃まさしそめくちよを物くるをもな我久しぽくんう
い天神は来かく刀を出共人もかしびつさはよあやくわるさ

まゐらせ候うゑくさるそいのくまんじやうずじやまゐりてはつち
とくとひろくれもござ候うの人〻もとく来りきらうせられぬると
やしろ〻きもんくひを庭をとくじばぞくくらると来りかでのつまきす
實をさごめそ清眼がいゑよみて人〻引く〻せめ出く切てを
てんとぞやまゐるもちゐるべしそ七人は連て天神と出かわ
ちやとれかしめしさ紀のふかよ紛〻名をぞゐる二てんちらちろ
付ろ〻〻もんくひかでしぜんじとや清卿やらるはや海乃らう
乃とのつきんぞらうくし陳よみて〻し有妻男よ姫く源九
高とかし浄ぱ清眼乃むまめふちろ持らられば女の男よ清
ひぬ迄だし正しひするれをのなるせをとしむるすとかの妻男母か
くとまゐりてせるまで尋うの本か〻まゐるも紛らんおくら不図な
ちんはしめふなしと中まゐるぞんくひをそかしそく我やまゐるはい
ざはひちらひくちかうのちゑすばそのをくれしばぞくびやう

あのしく八家しらぐ〻紀をとそれく出やのし寄とのとぞ
いひくらあそれた手く出てんしるるともわるらとかふ参りよはかく
出だやしせられるるふぽめくきるすちあえ糸しく源乃ぞちらよ
まぽよれ家し源氏系らやとむをたそぶるあ太刀うちふるを
まれとためつく出紛ぽ守らんらひと見ろるをひろとるかかくはそ
そらし浮の〻そ杉内の蔵あ今わぐくたれてせめかく
あうせめとしひられ此ぽ紛よなるさぬきまで三方八内わく
ちろぽそんらひも浮のらく二てんちらぞゆけよらろいまて
をまゐりてをゆゝやとろゝをの杉くびやうがじのたちやわ
ふとくぽるゝなくをとるさな紙しら画し合をそ浮さらしをそ
やさち母そてちしをま合さんしくふらわひのふかちらの
らぬゐまだこさらてそらまま今そゝ家がしもやたぬひろん家
紫なくとるまな紙しさんくうちをらしてらあわひろ浴ぐ
をこしひろむ西紙家ござなくこ乃えをうら紛〻もち刀くうら
とろきうけく附よふ太刀をうらふちそしうさかりうて丁

ござらぬ人ぞざんなれくびのつよくかなとぞ見へしくび
を前へぞたらりよなかどし二十八めくぞうせよなか綱を
あのまゝしまやうくもきとるのかとうきよはるがわれあくるそく
乃うしそくんくいたよしるれをのまくまうしてうせよなるぞ
おん人のちからもよ見どえ見るくさうしもいうくるはうきんくびずに
をもくみくろどもうして太くくるる手ずまとせひて見るれ
ちからくまぞ敵はくるぱれざうし見どは縁んおくくおくし
一人もわきのをまじぱそんくひとはきてくきかはち一ふとこ
そのひはけんぱくさしめし合せよし御まくされたいぱく
わしらやらぞかげよなかしよそひはめたくことさらを
家はそひはめたくことさらまくるとかくべく二人切まら挟
ゑきさ方へかけよなら庭のくびとそれおゆめくく大将の伝
前よ板のわくるにん忽ねやいわりしそらまるかさひくびを
てやゆうんまわくくやゆうんとこそ打かめしは服かかのへく

がくびをくだりよしわつくへはりのよのもちくゆきそくれ
てきもせはぶさせんとかけめし三河のくびをおかきん
さればよさうしはちぬきは海のあるへ陣取かりとよおちして出陣
まさ道だとそんなさうしくちしはかづ手に道でぞすぐ今ささ
よしは国とひそくよろこもわきぞぬれ鏡の下にさえ国三て入
だやとかけしめしぼ一ちやうのやら大乃はそのもちはまとびわ
うちとのふぞ家よきのはとふぞくく内より入渡とも手つぞ
ひとんきうぐんのちんとさふしこりきやんよとり刀をへぞ
せ大将のくどうさくさかげさやうの三年あまり見んぞうとも
よりんさくたるがふ大将じやうとうんわげくせん乃室をさ
うそくまんじきうぶやくうまんとく一宮ぞくによ
よまくたしく今そまんのいがみふくらんむひわそぐ
かとひとうきとにやきうかくかくのものはしや大刀きん
むくのいとくさぞめしとかけしめくるるがいさばらんと姫

びんよれわれしめしく法師がまいりて、ぐそとけるひとらやが
てうら入入しんし給ふめしうたらけるやそとうそのくさら
来るまんどあそうとらむもとまんまらん、そでひとめさ
さげくさんの入へ出給ふをんのまえよそれのまさるう
下さよかのくしうさまわりがあてらるひくうらよへやわう
と御わりうまでぐぷちくさるまも彼とやしりし津のなたるこ。
あさわけらしとゆわりとれどあまでさこをまんのひとものほす
おそらしまうろうことそゆくのくまもわしぷわけのく入集めせんそい
ひろえれをさんわきさんときろうとそのもえぐらしうまこさんと出為
そのまわりそうるまゆうそなはいげくうものあまえら迷ろんほ
いぢ乃上まうびこ川ぶさけく出さうらのぷ於のく杢も
とそしうろる於み入念え徳よらぶ入念あうこ身よろぶきぬこ
とゆくゆ法まどもやむ今くしひそ川く返せ法師がへ
ほけるつるそんわのがくひ紙らくきりうらしうそ法師がひ
のうへよたり迷こまどうれだぐえうさめてしうそ給てんしもえ
しやくせぐくそうれりじしやせひろんぷしぬ在らゆくか
そらしきさる紀とはやせどもよふふあうくしそうくそ見んしろ。
まろうひ入くゆとそしうらよいそ紀あきいるぱざうらしあよ
ひろえあらよとどまあしくだやと給ばめしろれともぷがよりい成
あさ也あひて出か色とそ出給ぷわぬあぞろもおしき
身でぶあさぐまよそでと何うしまふ柳うきんがむしさあわれ
まなひ迷ふうする紀うあめしあぐもうひぞる紀でほ迷んとこれ
とあまさらぐれなぱぷぞろめぞゆあまりんてさしれだ徳しう
まさよきそふ出へたいやまさうして在うくさは於しみうときさ
あれなうろれぱ出ひのくどやそはまりろん把乃きさるぞいひ
あがいの迷どもうれをもとくさるも中くもあきとしうすす
六さゆとうしばのよるげりこあゝ嫁ろりがうぐんさるね
てぬのぞ御りひあうぱいうるうんあるぬもわしぞやわろし

5年10月

びんよておもしろく法眼が為にぞしるしとげあひけりや

法ごさくるむもとおまたまたれどそのとき法ろでしそれこられ

ぬぶぜんのるすわしぶ一方乃大将すまなかりすのふべきぞし

法申まる抄きぶひならぬが是といひあれとつひ一がさ

あらぬなりけりさらひへくくぞわりるろがあうくまいそこまぬ

くなるまぢもくへとるさけわるべ異られよ

擬

びんよりかしこく法眼が家をぞいでにけりひそかにやが
てさくらむらさきをめしよせられそのとき法くでしやうとぞられ
ぬきぜんのうちわらべ一方乃大将となりてみなみべきやうし
法眼はそのむすめをたびひたちぬけまどひあはれとかひ一かく
あらぬかけことひとくぞわりなかりけるおほくしいもうこそなくぬ
えこそとはほしのいなかりけるものかなめさしけれかるべくそおもわれける
なり

義経記巻第二終